

調査研究

近代人口理論の史的展開 (一)

本 多 龍 雄

一、緒 論

(一) 人間の「生」と人口問題

生き甲斐のある一生を生きたいという人間本来のひたむきな願望が大きな障害につきあたって抑止されると、こんどは生きること自体がなにか無意味で疑わしいもののようにさえ思われてくる。よりよく生きようとする激しい人間的欲求がまた生存の事実そのものに對する強い反省をよびおこすのである。われわれの社会生活の中に人口問題とよばれる多分に自責的な理論的反省の生まれてくる事情にも何かそのような個人的心境の推移に似たところがあり、深く人間的生の構造に根ざした共通の理由をもっているようである。

生きることは、少くとも人間にとっては、常によりよく生きることを意味する。どういふ事情でこの大地の上に人間的生が営まれるようになったかという人類發生の自然史的事実を回想してみただけでも、そのような人間的生の構造は原始的な単純さをもって一そうはっきりと納得されよう。人間は、解放された手によって、またそ

の手にもつ道具によって、つまり人工的な技術的作為によって、自らその生活空間を拡大し改善してゆくところの一つの新しい生物種として自然の中に一つの生物的・自然としての生存権をもつことが可能となつた。環境への自然生物的適応は環境そのものを自分から変化し改造することによって始めて実現されたわけで、それが同時に自分自身をも亦たえず変革し転身させてゆく真に人間的な生のはじめであつた。生成と転化にその全存在をかけているということ、そこに人間的生の真髓がある。よりよく生きるとは、人間にとっては、むしろ生ること自体の最初の條件であり、生きるとはこゝでは常に自然的生以上の或るものを孕んでいるといつてよいのである。動物的生にとっては単に種の代表でありその手段でしかない個体にもそれぞれの生涯を通じて実現されねばならぬ自己目的々な価値があると考えられるのもそのような人間的生の存在構造と無縁なことからではなく、種の生長を象徴する個体の増加が個体自体の生長を伴ふことなしには期待しがたい理由も亦そこにあるといえよう。そこにすでに人口の量的増大と質的進化、生活空間の広さと生活水準の高さとの間の、相互保償的であるがゆえにこそまた相互背反的な

運動をも惹きおこす勝れて近代的な人口問題の一主題はその發生の可能性をひそめているといつてよい。

ところで、手の解放にはじまる道具の發明、技術的作為に媒介された生産的労働は、人間を同時に社会的動物として宿命づけた。生活空間の拡大と改善は社会的協同作業によって始めて可能なことであつた。生成と転化の中に実現される人間的生の真髓は人間が生来的にもまた有意的にも這入り込むさまざまな社会関係の中でこそ生長もすれば、また萎縮もする。よりよく生きようという人間本来の欲求さえ長く停滞した社会体制の中ではその生長を押しつぶされてしまった例も尠くない。貧しく、乏しい毎日の生活の単純な繰返しの中に却つて深い生のよるこびを味得しようという勝れて東洋的な智慧もやはりそのような停滞社会の生んだ一つの文化類型であつた。生き甲斐を感じることもなしに生きることは人間的生にとっては生きるに堪えない苦痛なのである。そのように常に歴史的に制約された社会的存在として、人間は、自然の生命を本当に自分のものとしながら、同時に自然ときびしく対立するわけになる。したがつて、人類社会にとつては、その自然生物的の生命の保全も歴史的・社会的な諸制約を離れたものではない。最も自然生物的な生殖本能さえ社会的理性によって補修され、その一部は完全に代置されてしまつてさえる。そうだからこそ社会事情のいかんによつては理性が動物にも見かぬないような凶悪な行為のもととなる。つまり、社会的存在として人間的生に齎らされた巨大な前進はそのような本質的に危機的存在として始めて可能であつたことになる。人類種に到つて始めて可能となつた個体の不断的量的増大、つまり人類社会の進歩の象徴である人口の増加が、それに相応した社会的進歩を欠く場合にかもし出す全社会的な破綻と苦悶は、そのような危機的性格の最も本格的な現われといつてよいものである。

したがつて、危機の成熟は巨大な前進と表裏して進行する。それ

は人間がその全存在を社会的自己疎外運動の帰趨にかけているという事情の当然の運命といえよう。社会的協業による生活空間の拡大はもともと人口の保全と涵養を目的としたものであるが、この巨大な生産活動の組織はその生長につれていよいよ強くそれ固有の自然必然的な運動法則の主体となる。そのような物の生産及び再生産組織の中では人口も単に一つの物的条件以上のものではない。社会的生産力の拡大再生産という基本的要請は富の集中と社会成員の階級分化を必須の前提として貫徹された。過去数千年の人類社会はそのような階級社会の階級的利害の中で人口の推移を規制してきた。それは人口の増加を時には異常に促進し、時には又つとめて抑止もしたが、それが階級社会の階級的圧力の作用であつたことにかわりはない。しかし、人口をいわば生物学的に破産させてしまつたような場合は別として、この階級的圧力が完全にその人口統制の作業をはたしえた場合はむしろ稀れであつたことも想起しておく必要がある。この不一致は単に時のずれということだけで説明しつくせない含蓄をもっている。そして当面の経済的合理性に相応しかねる人口の執拗な相対的独立性こそ、当面の社会経済体制に対する社会的反省の最初の拠りどころでもあり、階級的抵抗の最後の抵抗陣地でもあつた。人口問題はそのような体制的危機の表現として現われるとき最も本来的なすがたをとる。つまり、現存社会体制の階級的構造が生産力の発展に必要な推進体であるよりもむしろその前進を妨げる障壁物となり、そのような経済的進歩の行きなやみが人口の抵抗として参照されてくるときに、いわゆる人口問題はわれわれの社会意識の識域にとりわけ大きく浮かびでてくるのである。

そういうわけで人口問題の發生はもともと生産の主体であつた人間自身の立場への余儀ない関心の發生をいみする。それは強要された社会的抑制に対する人間的反応が客体的な人口量の變動として社会的に告白されることだといふこともできよう。人間的生の

本体はその客体的所産を超えたものでなければならぬが、さりとてそのような表現を離れて別にその本体というものがあるわけのものでもない。われわれはこの掴むことのできないわれわれ自身の本体を人口の量的推移の中に人口問題としてつかまえるのである。客体的必然性に支配された人口の推移の中に現存社会の体制的欠陥と矛盾を解析し、人間的生の無言の抵抗と抗議を解説すること、そこに人口問題の本義はあるともいえよう。それは人間的生が人間的生の真髓をとりもどし新しい生成と転化の機に撞着していることのないよりの証佐でもなければならぬ。

しかし、人口問題のそのような真意は必ずしも常に自明のことからであつたわけではない。人口の虚実表裏した構造は、当面社会の体制的欠陥や階級的矛盾の指摘に指向するよりも、かえつて屢々それを陰蔽し弁護しようとする理論的態度の中で逆用された。しかし又、そのような階級的圧制が拒否しがたい応分の史的存在理由をもつていたかぎり、人口の社会的不適応を人口自体の社会的非合理性に帰着させ、階級的圧制を当然化したまた永遠化したような理論的行き過ぎも、やはり問題の全貌を解明するのに必要な一つの段階であつたともいえよう。この非合理性を現在社会の歴史的体制がその歴史的合理性の限界点に發生させる社会自体の事柄として反省するには、問題自体の出口のないような行き悩みや、とりわけそのような行き悩みに抵抗する人間的反抗の社会的結集が必要であつた。そういうわけで近代人口理論もまた、現在社会体制の歴史的要請を擁護し貫徹しようとする支配階級の階級的理論としてその理論的結構を完成し、新しい時代の登来を促進する階級闘争の成熟につれてその理論的再吟味と再編成を必要とするようになってきたといつてもよい。近代人口理論の史的発展を跡づけるのに一ばん大事なすじみちもまたそこにあるといつてよいであらう。

(二) 人口問題推移の概貌

古代ヘラスの都市国家が経験した人口問題は近代社会のそれと極めて似たところが多かったが、奴隸制社会の常としてその生産的労働が主として奴隸階級の肩にかゝつていた点にその人口問題の特殊な推移を理解するかきもまたあるといえよう。女奴隸の懐妊は売られた労働力の窃盜と考えられ生殖の自由も否認されていて、新しい必要労働人口は略奪と売買によって自由に補給された。つまり彼らには人権もなく、したがって人口問題の対象となるわけもなかった。しかし人口問題の一ばん核心的な部分を外部社会に肩替りさせてしまった幸運はかえつて大きな不幸のたねともなった。というのは、自由な市民階級が小さなポリスの繁榮に固執しその成果を享樂するために強く人口の制限を必要としたとき、それは彼らの生産的労働を卑しめ忌避する態度の蔓延と重なり合つて一部には子供を産むことさえも忌避するような状態にまで押し進んだ。それがかつては地中海岸に植民したヘラスの民がその都市国家終焉時代に落ち込んだ末路のすがたであつた。

古代奴隸制社会は帝制ローマの軍事的強権の下にもう一度その統合と再編成を実現するが、それも結局は古代ヘラスの都市国家の人口問題を一そう大規模に再生産したものであつてもよいようである。強力な階級的な収奪体制も前進的な階級闘争を成熟させることなく、その没落期には貴族も自由民も農民も奴隸も全階級をあげて人口減少の途を辿りながら過剰人口の苦悶をいよいよ深化させていった。唯一の新しい人間的反抗は原始キリスト教の生成過程の中に試みられたが、それも最後は超現世的救済に逃避することによってのみその運動を完成しえなすぎない。古代社会の新生は多産なゲルマン農民の侵入と封鎖的な自然経済の再建、中世的封建体制への推移りゆきによってのみ可能であつた。

中世封建社会は人口再生産の母胎である家族生活形態の再建と破壊的な混血運動の防止とにとくに好便なものではあったが、その全体制自体は生産力の発展に極めて阻止的であった。収奪された富が寺院を通じて辺境の開拓移住に若干の寄与を果して以後、末期中世代となると農村人口は完全な過飽和状態となり、戦争と飢饉と悪疫とが間断なく人口消去の役割りを受けもたされた。三十年戦争のように度を過ぎた被害をひき起した場合もあるが、空白は旺盛な人口増加力によってすぐと填められてしまうのを常とした。封建的拘束を犯して累増した農村人口の逃亡は封建体制の階級的抑圧の結果であつたとともに、またそのような抑圧体制によって最早おさえきれなくなつた人間的反撥の現われであり、旧体制内に胎動しはじめた近代社会の生長を告げる事実でもあつた。

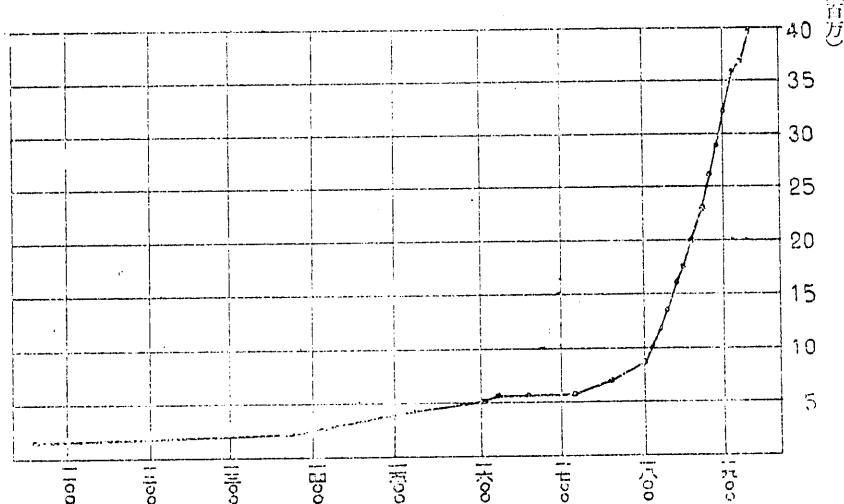
近代社会はなかく農民の家族生活の中で護持された潜勢的人口増加力を不安定だがそれだけまた弾力的で多分に賭ばく的な都市労働市場の中に解放した。もちろん人口は社会的伝統の最も頑強な体现ともいってよいもので、古い素材は新しい時代の要求と重なり合つて錯節した過不及の波をつくる。農村の停滞的過剰人口が新産業の必要労働力として再編成され、近代国民社会の誕生をみたとき、この再編過程に対する人口の隨性的抵抗はこれら近代専制国家の啓蒙的君主やその政府をしてなかく新国家の人口増加に専念させた。実際にまた新産業の労働需要はその供給を上廻つていた。一例を一五世紀から一六世紀にかけてのイギリスにおけるマニユファクチュア工業の発達にみる。それが農村の過剰人口を苦もなく吞下していつた事情はこの時代がイギリス労賃の黄金時代とよばれていることから察することができよう。しかし近代資本主義がそれ固有の技術的基礎を確立した産業革命はさらに一段と劇時代的な生産力の発展を実現しながら却つて深刻な過剰人口の訴えを捲きおこしている。標本例をやはりイギリスにとる。すでに一七世紀の後半期か

ら羊毛工業の発達につれて農地の牧場化が強化され領主たちの方から農民を追放しはじめたが、一八世紀後葉に始まる産業革命とそれに併行する本格的な農業革命は旧来の農民たちを完全に土地なきプロレタリアに転化した。都鄙を通じて「貧民」を氾濫させた時代であり、マルサスの人口論が時人に共感を強要した眼前の史料もまたこの過剰人口の事実であつた。それは本格化した近代的階級分化の進行が旧い産業構造を解体し新しい労働力人口を創出しながらこれをなお失業と貧困とをせしてなれば動物的な多産の中に放置しておくほかなかつた時代の形相であつたには相違ないが、それはまた近代的労働市場の中に解放された人口の当然に迫るべき運命の素描であり、近代社会における人口の動きを一貫する本質的な傾向の最も露骨な現われであつたといつてもよいものである。「貧民」たちは国庫の救恤をうけながらいわばただ動物的な本能によって生存し増殖した。かれらにとつてはそのような動物的な力によって生きる以外にはその社会的生存権を主張する方途がなかつたわけで、それは国民人口の強暴な再編過程の中に生まれてくる新しい労働者階級の新世代に対する最初の自己主張であつたといつてもよいものである。またさういういみでこそこれら貧民の犯濫は人口問題として時代の問題となつたのであり、マルサス人口論の史的素材となる十分の理由をもつていたといつてよいのである。近代人口問題とその推移はこの新しい生産様式が要請する近代的階級分化の進行とその歩調をともし、過剰人口問題のつよく再燃するところそこには必ずこのおなじ階級分化の新しい進行と発展があるといつてもよいであらう。

産業革命期の波瀾をすぎたから、一九世紀中葉以降資本主義の自由な発展期には、国によりいろいろの偏差や遅速はあれ、近代的階級分化は全国的規模において進展した。かつての強暴な国民人口の再編成過程は次第に内攻的な経済的強制にかわつたし、生産力は

劃時代的に増大し、人口収容力は著しく拡大された。この時代の先進資本主義諸国に実現された史上未曾有の人口増加はその一斑を第一圖のイギリスのそれとみるとおりである。死亡率の恒常的な低下がこの人口増加にあずかる主要因であったことは周知のとおりで、

第1圖 近代における人口増加
(イギリス及ウェールズ)



(備考) 18世紀以前は推計人口, Carr Saunders による。即ち 1066年 150万, 1381年 235万, 1415年 300万, 1509年 400万, 1528年 435万 6千, 1603年 500万, 1625年 550万, 1660年 550万, 1714年 575万, 1760年 700万。19世紀以後はセンサス人口。

それは近代社会の恩恵を象徴するに足る事実であつた。貧民の氾濫は社会の表面から姿を消した。しかし過剰人口の悩みはそれだけ資本主義社会の構造的な本質とむすびついた内攻的事実としておこいかにってきたともいえよう。死亡率の低下にくらべて出生率の低下は

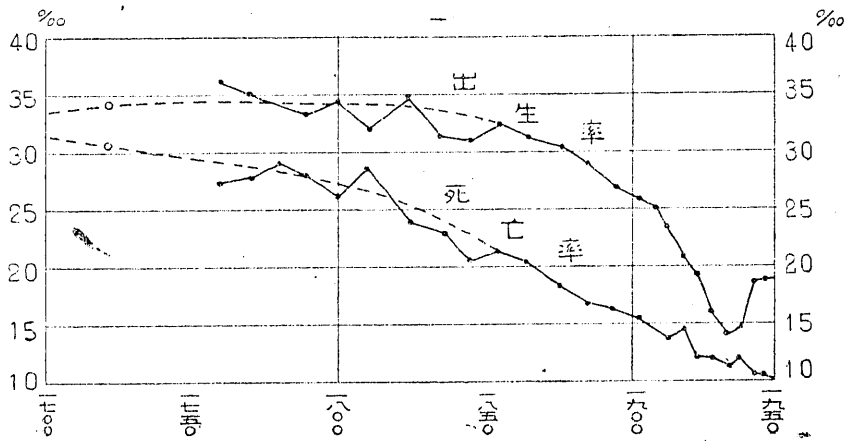
ながく立ち遅れていた。それは向上発展期の野性的な生活意欲を反映する事実ではあったが、それだけにまた人口増加速度を強化し近代的階級分化を一段と活潑に促進させた。往時の民族移動を思わせるようなこの時代の西欧諸国の大規模な海外移住はどのような国民的活力を背景とした過剰人口の圧力を実証するに足る事実といえよう。過剰人口の杞憂があたかも人類社会に宿命的な亡霊でもあるかのようには考えられたのもまたこの時代であつた。一九世紀後半期の人口論者の諸説を散見する人はたれでもそこにマルサスの誇張や断定を捨てたマルサス主義、人口はともかく殖えすぎて困るものだという偽らざる心情が疑うべからざる実証的事実として告白されているのを窺見するだらう。マルサス理論のそのような通俗化こそ過剰人口が庶民大衆の日常的事実として普遍化してきたことのないよりの証佐といつてよいものである。

出生率の恒常的な低下傾向は西欧諸国においては一九世紀の七〇年代を経過するころに始まる。それは資本の著しい蓄積と集中、巨大独占資本の生長、資本主義の帝国主義的發展段階への推移と照応し、一方における生産力の飛躍的な増大が他方に階級的隔差を一段と増大させるに到つた時代の出来事であつた。一般化された高い生活水準の中で累加する階級的圧力が過剰人口の事実を心理的にも一そう切実なものにし、マルサスの思想的含蓄がいわゆる新マルサス主義運動となつて大衆の日常生活の中に広く実践されるようになったのは至極当然のことといえよう。

産見制限思想の普及による出生率の低下は第一次大戦以後とくに加速的に進行し、死亡率の低下がほぼその最低限度に近づくとつれて人口の自然増加率をますます縮小した。出生率が死亡率を下廻るに到つたのは今のところ一九三六年以降のフランスだけであるが、青壮年人口層が膨らんでいて出産に有利なこれら諸国の特殊の人口年齢構成を無視してはなるまい。そのような事情を掣肘するために

考案されたクチンスキのいわゆる人口の純再生産率は北西欧諸国にあってはすべて一を割っている。すなわち現在の出生死亡関係は現在こそなお多少の人口増加を記録してはいても実際には現在人口を置きかえる力に不足しているわけになる。第二図は過去二世紀半に

第2図 近代の人口動態の概勢
(スウェーデンの出生率と死亡率 人口千に付)



(備考) 18世紀前半は総平均率により、1750~1820年は10ヶ年平均、以後は概ね5ヶ年平均による。1820年までは Carr Saunders, The World Population により、以後は Kuczynski, Measurement of Population Growth による。但し1921以降は国際連盟年報による。

わたるスウェーデンの人口動態をしめしたものであるが、この動態記録は古い資料の完備と戦争などによる攪乱の少い点で北西欧諸国の近代人口動態の典型的標本として最も好適のものである。スウェーデンの純再生産率は一九二一—二五には一・〇五八であったが、一

九二六—三〇年には〇・八五七となった。一九三七年には〇・七六一にまで低下している。他の西欧諸国のそれもほぼ今世紀の第二四半世紀にはいるころ相前後して一を割るに到っているといつてよい。

而次の大戦にはさまれる期間、とくに三〇年代の学者はあまり遠くない将来に人口統計学的必然性を以って發生する人口の急激な縮少過程を警告し心痛した。過剰人口の恐怖は減衰人口に対する配慮にとつてかわられたといつてもよい。しかしそれが果して近代資本主義社会に宿命的な悩みのたねであつた過剰人口の苦悶を清算しえたものであつたかどうかは別個の問題で、過剰人口傾向が現実的にも心理的にもいよいよ強化されながら、そのためにこそ人口は生物学的破産の過程にまで突入するのだと考ふる事も架空の幻想とはいえない。のみならず、先進諸国における人口のそのような停止的ないし減少傾向は他方の後進諸国や植民地的未開發地域における著しい人口増加や過剰人口の累積と対応し、決して相互に無関係のものではないことも注意しておかねばなるまい。

史上未聞の爆發的人口増加とそれにつゞく出生の制限、しかもこの人口動態の近代的均衡化運動を減衰人口の杞憂にまで追いつた後進地域の人口の動き——そのような史的推移は、生活空間の近代的解放を生産的労働力の人格的解放に求めた近代社会に当然の運命でもあつた。それはたえずより多くの人間を自由な個人として労働市場に追い立てながら同時にその人間的生長と抵抗を増大させる近代社会の階級分化が、一途な階級分化の進行の中に生長させるその保償と、しかもそのような保償作用の中に再生産せざるをえない新しい対立運動の必然性を、人間的「生」の反応運動として映し出したものといつてよいのである。

(三) 近代人口理論史の課題

人口理論は人口問題の本質を論理的秩序の中に展開せねばなら

ぬ。しかし人口問題の発生とその推移が深く人間的生の存在構造に根ざし、とりわけ社会の階級的構造とその推移によって決定的に支配されたものであるかぎり、階級的利害の葛藤は理論の構成にさまざまのかたよりを与える。むしろ階級的利害を強く代表しその立場を徹底することなしには問題の真に理論的な構成は不可能なのだと言えよう。社会的な強制と抑圧の中に成就される人間的生の生成と進化、適応と反撥の諸運動の史的含意を読みとることは集積された人口現象の単に人口統計学的な解析によって窺みうるものからではない。

人口理論のそのような余儀ない階級理論的偏向は、当然に、人口理論史の研究に特別の重さを負わせざるをえない。問題の全幅的な理論的展開はそのような史的展開過程を理論的に再構成する作業を通してのみ始めて達成されるのだということもできよう。といつてもそれは秘匿された永遠の真理を単に歴史的な代用品で模倣するといういみではない。こゝでは問題自体が本質的に歴史的なのである。問題が単に歴史的・社会的に制約されているというだけでなく、歴史的社会の危機的状况に呼应し、その真に歴史的な転機に参与するといういみで歴史的なのである。したがつてこゝでは理論の体系的統一も又その構造的連関の内面的必然性も問題自体の歴史的な必然性にその根をもつている。そして近代人口理論の体系的統一は、なによりも一つの歴史的社會としての近代社會の歴史的統一と、その生成、発展、転化の歴史的必然性にその理論的迫力を負うているものでなければならぬ。

そういうわけで、近代人口理論の史的展開を跡づけようとする試みは、同時に今日当面の人口問題に対処すべき人口理論の体系的編成を志向するゆえんでもあるわけであるが、以下の小論が利用価値をなくしてしまつた学説史以上にどこまでこの註文に答えるものとなるであろうかは一応考慮の外におく。

二、マルサス人口論が古典経済学の 一礎石となるまで

(一) マルサスとその時代

その頃、一八世紀末葉のイギリスは産業革命の渦中にあつた。嘗て「ユートピア物語」の著者トーマス・モアによつて羊が人間を食うと諷刺された農地の牧場化による農民の流亡はこの頃には新しい資本家的借地農業者の登場、本格的な農業革命の進行につれて形をかえて一段とまたその深刻さを累加した。そして典型的な農村工業となつた羊毛工業の中に一時の繁栄と独立を享受した一部の自由農民の生活さえも再び根底から破壊されはじめた。機械の進歩の速さはかれらの資本の蓄積速度を遙かに超えたものであつた。かれらの繁栄の物質的基礎そのものが却つてかれらの没落を一段と促進する発條に転化したわけで、そのような前期資本主義的な独立生産者層の没落過程の中に新興の産業資本は自らの必要とする新しい階級分化、特に新しいプロレタリア人口を容納なくつくりあげていった。機械工業のためにその産業を奪われその生命を酷使されるようになった労働者たちにとって機械がうらみの対象となり、しばしば機械の打ちこわし運動まで行われたことはそのような当時の世情を物語って遺憾ない。全く生計の途を喪つた貧民層は都鄙を通じて氾濫し、貧民救恤のための困庫の負担はいよいよ累加したばかりでなく、救恤は却つて一そう貧民を増殖させるようにさえみえた。そして貧民階級に通用な無智と無思慮とからくる野放図な多産は社会生活の枠から脱落した動物的な過大増殖力を思わせるに十分なものであつた。およそそのような世情の中でマルサスの人口論は生まれたわけで、それはこのような世相をまさしくその額面どおりにとりあげたものといつてよいのである。

曰く、人間は、凡ての他の生物と同じく、その生存資料の限度をこえて増殖しようとする傾向をもっている。そして人類社会史上に絶えることのない窮乏や罪悪はこの過大増殖傾向を辛うじて抑止するために避けることのできない必要悪である、このような「人口原理」の作用こそ人類社会の進歩を妨げ、また未来の理想社会の設計をも幻想化せざるをえない所以であるとおもふ。マルサスはその後、その人口論執筆の当の論敵であった無政府主義的共産主義者ゴドウィンとの会談に暗示をえ、第二版以後においては、人口の過大増殖傾向を抑止する妨げとして、「窮乏と罪悪」に加えて更に「道徳的抑制」の可能をとき、その陰惨な人類社会史観に一沫の明るい希望をつけたしはしたが、しかし道徳的抑制の可能をとくことは却ってまた下層階級の貧乏と多産とを一段と強くかれら自身の責任に帰着させることにもなるわけで、その反民衆的感懐は一層露骨に表現せられるに到ったともいえよう。

一七九八年にその初版を發行し、増補訂正を加えながら生前六版を重ねたというマルサスの人口論が賛否両論の中に一世に喚起した反響の大きさは広く爾余の学問史上に類例を求めても確かに比類のないものであったらしい。がこの世俗的成功はその論旨の通俗簡明に加えて、時代の政治状況に負うところも少なくない。その頃イギリス朝野の関心の対象であった隣国フランスにおける大革命は日とともに急進化の勢をしめし、当時のイギリス支配階級に大きな驚怖と強い反動をよび起していた。そして足下に氾濫する貧民と貧困は是非とも一応の理論的弁明を要求していたからである。この眼前の社会悪を自然法則的な必要悪に帰着させ、乃至は個人的な道徳的抑制の不足に転嫁させるにはマルサスの人口論はまことに格好の理論であった。人間が一般生物とその運命とともにする過大増殖傾向はどのような階級的志向を背景として近代人口理論の根本前提にとりあ

げられたわけになる。

(二) マルサスの独創

考証すきの学説史家はマルサス人口論の起源をたずねて遠く一六世紀末葉イタリーのボテロにまでさかのぼる。ボテロは当時のイタリア諸都市における人口増加の停滞化を前にしてその原因を都市自身の人扶養力の停滞化にありとし、それ自身には無限なはずの人類の増殖力が一定数に達して後はそれ以上に進もうとせず、事実また三千年來ほとんど同じ水準に停滞していた理由も亦この人口扶養力の限度、生存資料の不足とそれにつれて強化される疾病や伝染病の妨害作用にあることを指摘している。文献史的考証を更に遡るなら、われわれは同じ世紀の初葉同じくイタリアのマキャヴェリにまで達しよう。かれはそのフロレンス史中に、限られた領土内での人口増加が生存資料の限度をこえる危険をとき、この過大人口を抑止するものは欠乏と疾病であることを指摘しているのである。之らは文献史家が好んでマルサス人口論の先駆的萌芽として引用するところであるが、しかしその思想的含蓄は必ずしもマルサス人口論の語らうとするところと同じとはいえない。というのは、これらの論策の趣旨とするところは人口の過大増殖力を指摘するよりも寧ろその扶養力の行き詰りを嘆じているところにあるからで、その根底においては重商主義時代の人口謳歌思想を背景としているのである。それは同じ世紀のフランスの自由貿易論者ボーダンによって印象的に表明されたような人口にまさる富も力もないという思想の埒をこえたものではない。ただ世界史の第一線から退場を余儀なくされていた当時のイタリー都市国家のし、儒的早老性がそのような理論的変種を生みさせたのだと考える方が至当であろう。無限の人口増殖力について語っても、そこには全人類史を支配するような思维的迫力はなく、したがってまたその社会的経済的な抑制作用の分析にも人

類社会の進化の緩急成否にかゝるような深刻な懐疑が欠けていた。近世史の主流はイタリーを去って西にうつり、新しい生産様式の發展はとくにこれら西欧諸国で封建的停滞人口の解放を實現していったし、そしてこれら新生民族国家群の重商主義的体制は人口増加を以って至上の国策として採用するに到った。

しかし、新産業のおまニユファクチュア的な技術的狭隘性は、とりわけ絶対主義的王政とそれに寄生した前期的独占商業資本の収奪の中で、都鄙を通じて次第に生業にこと欠くプロレタリア的人口層を累積した。そしてこれら下層階級人口の驚くべき多産と多死とが、農村においても、またとりわけ都市においても、人民大衆の宿命的な生態となるに到ったことは、このような事実の人口統計学的觀察に前人未踏の境地を拓いた一七世紀イギリスの統計学者ジョン・グラントの偉業によって一段となま／＼しい。人間が羊に食われたという農業革命下のイギリス農民の都市流亡はロンドンその他の諸都市を急速に肥大させていったが、当時のロンドン市が著しい死亡超過の中にあつて年とともにその人口を増大していった実情をわれわれはグラントの刻明な数字の中に再想することができる。それが新興ブルジョワジーのめざましい生長と富の集積、議会における王権との劇的な闘争とその輝かしい勝利の記録に回想される一七世紀イギリスの實際の世相であつた。そういうわけでこの時代のイギリスの重商主義的思想体系の中にもすでに人口問題に関する近代的な懐疑の萌芽がみとめられるのは異とするに足りまい。世紀の初葉にはウォーター・ラレーがあり、後半期にはマッシュウ・ヘールがいる。戦争や飢饉や悪疫が殖えすぎる人口の調節者だとはラレーの指摘するところであり、人口の幾何級数的増加率はすでにヘールの語るところである。ただこれらの思想的萌芽がこゝでもなお考証的興味以上の程度をこえないのは事実の理解に強い理論的反省が欠けているからで、つまりはそのような多産多死の中に剪除されてい

った人口層がなお新しい労働者階級としての地位をえず、したがってまたその苦惱も一つの社会的な要求として結集されることとがなかつたからだといえよう。思想の運命はその点きわめて逆説的で、当時の産業技術水準下には熄むをえないものとして当然視されたこの自然必然的運命はそのためこそ自然必然的な事実として強く反省されることも亦なかつたといえる。

マルサスの人口論を生んだ一八世紀末葉のイギリスは、近代的生産様式がその技術的基礎を確立した産業革命下の本格的な近代的階級分化の進行途上にあつた。それは多産多死の最低生存線上に放置されていた人口層が新しい労働階級として再編成されていった時代である。その階級的自覚は当時なお機械のぶちこわし運動の程度をこえなかつたとはいえ、集団的な反抗運動はすでに階級分化が動かしがたい社会的存在となつていたことを実証するものである。一八二四年イギリス労働者が世界で最初の団結権を闘ひとつたことは産業革命渦中におけるその階級的自覚の急速な生長と成熟を物語るに遺憾ないものである。そういうわけで、大陸における大革命の進行が一方には大きな希望を、他方には深い恐怖を、イギリス朝野に掩きおこさざるをえなかつたことも異とするに足りない。そのような鋭い階級的対立を背景としてこそこの新しい人口階級の逞しい生活力は人口理論的反省の対象となることができたのである。マルサスの人口論が時に剽竊を難ぜられるほどにかす／＼の類似的先行思想をとり入れながらも人口理論に劃期的な一転機をなすに到つた本当の理由も亦そこにあるといつてよいのである。

そういうわけで、マルサスの登場に先立って、すでに一八世紀後葉の思想家たちが準備したマルサスの思想の素材は更に夥しい。マルサス人口論のかたき役となつたコンドルセーやゴドウイン自身がすでに人口問題に注意を喚起し、待望される将来の理想社会が一番当惑せねばならない難問難として、欠乏による妨げのなくなつた場

合の人口増加の問題について鋭く自問しているのである。そして妨げの少ない自由な人口増加の如何に著しいものであるかはすでに一八世紀の中頃にベンジャミン・フランクリンが新大陸アメリカの実例について指摘していたところで、こゝでは人口は二十年にして倍加する計算になることが報告されている。またヒューム対ウォーレスの古代人口論争は人口の増加を妨げるさまざまな悲惨な社会的事象に注意を喚起するに十分であった。眼を当時草創期にあった経済学史上に転じて、デュームス・スチュアートはその経済社会発達の歴史的展望に強く人口の要因を引き入れ、人口と食物量との関係の問題としていたし、アダム・スミスも亦その「國富論」(一七七六年)に人口問題を労働需要の問題として大きくとりあげている。

尤もスミスは人間に対する需要が、一般の商品の場合と同じく、必然的に人間の生産を調節するものであることをとき、したがって人口の増加は富の増大の象徴である所以をとり、人口増加に対する重商主義者の樂觀的見解を継承している。人口の推移を強く社会経済的條件から捉えようとしたその態度に間違いはなかったが、社会の富は社会全体のために増進されるという樂天的な自然調和の思想はなお産業革命の明暗表裏する全成果を経験する以前の資本主義的生産様式に対する一面的な讚辞であった。マルサスのぬかりなく批評したように、資本の蓄積は労働に対する需要を高めはするが必ずしも食物の増加を伴わず、労賃を実質的に高めないとはいえず。それはすでに時代の公然の事実となっていたわけで、資本主義経済のそのような矛盾した性質の指摘はジョセフ・タウンセンドの匿名の著書「救貧法論」(一七八六年)になると無邪気な露骨さのままにあらわれてくる。タウンセンドは、卑賤な社会的機能を果すべき貧民が、別して貧民の間に行われるところの人口の原則によって、常に絶えることがないというところが人類の幸福のために必要な一ヶの自然律であるといっている。タウンセンドのいう人口の原則とは

貧民の無思慮からくる増殖と食物の量によるその規制を、したがって必要な貧民層の絶えざる存在と、空腹による平和的な労働強制のことをいっているのである。マルサスはタウンセンドから多くを借用している。しかし貧困を富の必然的條件として讚美したタウンセンドの無邪気な露骨さにはまだ事態の本質に対する階級的自覚と理論的粉飾が欠けている。別して貧民の間に行われるところの人口の原則を自然生物学的な必然性にまで一般化し、そこに人類の全社会史を支配する不可抗力的な原理をみようとしたりした粗硬ではあるがともかく一種の歴史哲学的な構成は、その簡明直截な理論的定式化とともに、あくまでもマルサスの独創に帰すべきものであろう。

(三) マルサス人口論の要旨

マルサス人口論の要旨をマルサス自身の要約した形でしめすと左のとおりである。曰く、

- 一、人口の増加は必然的に生存資料によって制限される。
- 二、人口は、或る極めて強力かつ顯著な障害によって阻止されぬかぎり、生存資料の増加するところでは必ず増加する。
- 三、これらの障害、人口の強大な力をおさえその作用を生存資料と均り合わせるところの障害は、すべて道徳的抑制、罪惡および窮乏に分解することができる。

しかし、この要約はマルサス人口論の眼目点、とくに生存資料の限度を絶えずとえようとする過大増殖傾向の強大さを印象づけるにはあまりに散文的である。この事情を説明するためにマルサスが試みた有名な数式的表現はこうである。人口は妨げさえなければ幾何級数的に増加する。有力な妨げの皆無に近い北米諸州の人口を例にとると人口は二十五年で倍加すると考えても決して過大ではない。即ち人口は二十五年毎に倍加してゆく力をもっていることになる。反之、生存資料、とくに土地生産物の方は、進んだイギリス農業を

例にとつてみても二十五年にその生産量を倍加させるには絶大の努力を要する。がたとえこの努力が成功したとしても土地生産物の増加には土地収獲遞減の法則が作用するので投下された労働や資本の増加と同じ割合では増加がたいから次の二十五年間には同量の増収を期待することは困難になる。がいまこの困難を無視するとしても土地生産物は二十五年毎に単に算術級数的に増大させるのがせいぜいのこととなる。したがって兩者の増加速度を数字で対照してみると次の如くで、その不均衡なことは一目瞭然だというわけである。

人口 一、二、三、四、八、一六、三二、六四、……
食物 一、二、三、四、五、六、七、……

このような過大増殖傾向をおさえるには強力かつ顕著な障害がなければならぬ。終局的な障害は食物の不足であるが、しかしこれが実際にあらわれるのは飢饉のような場合に限られている。普通に働く直接的な障害が上記の道徳的抑制、罪惡、窮乏の三種類に分解されるわけである。このうち道徳的抑制が爾後につけ加えられたものであることについては前段にふれたとおりである。この道徳的抑制はまた別の見方から分類すると勝れて予防的な妨げとよばるべきものであるが、しかし乱雑な性交や不自然な情慾などのような非道徳的な罪惡も亦マルサスはこの予防的妨げの部類に属するものとしてゐる。反之、それが罪惡より起ると乃至は窮乏より来るとを問わず多少の程度において人類の天壽を縮めることになる一切の原因をマルサスは積極的障害といひ、不健全な職業や過重な労働、極端な貧困や子供の栄養不足、それから戦争や疫病などをその例にあげてゐる。戦争のような場合は罪惡を原因とし窮乏を結果とする混合的性質のもので、なお人力を以って回避しうるものであるが、しかしこの積極的妨げの大部分のものは人間の如何ともしがたいところの窮乏を原因とするものであることをマルサスはとくに強調してゐる。

そういうわけで、これらのさまざまの社会悪は根治しがたい。理想社会はたとえ一度この世に実現されたとしてもこの人口の原理によつてたちどころに存続不可能となり、私有財産制度は復活されねばならないことになる。貧民を徒らに救恤し増加させる貧民法は排止せよ。貧民自身がかれらの貧困の原因なのだという主張がその当然の結論となる。

人類の全社会史を蔽う大衆の苦悶、とりわけ眼前の新しいプロレタリア階級の窮乏に不可抗力な諦観を強いるマルサス人口論の要旨は右のとおりであるが、この理論的結構を一貫する態度も亦きわめて簡明である。經驗的に異論のない自明な現象をつとめてその社会経済的な本質から抽象して、普遍必然的な自然法則として永遠化し固定すること、そこにマルサス人口論の理論的獨創性はかくされているといつてよい。とりわけそれは「人口」とその推移をその歴史的社会的な構成から抽象して表象しようとする態度の中に著しい。それが現存社会体制の受益者たちを眼前の社会的苦悶に対する責任から解放しようとする階級的利害に表裏するものであることはいうまでもないが、われわれは寧ろそのような階級的利害の深刻化を背景としてこそ近代社会の人口問題ははじめてその問題の重大さにふさわしい一つの理論的構成を完成しえたものであることを深く銘記する必要がある。時代の問題を少くともその現象形態において正確に反映するためにもそのような徹底した階級的志向が必要であつたわけで、そこに近代人口理論の史的発展の中でマルサス人口論の占める不拔の意義も亦あるといつてよいのである。

(四) 「人口悪」思想の本質

マルサス的人口論の真価は、そういうわけで、よい意味にもせよ悪いみにもせよ、近代社会の階級的利害を支配階級の立場から強く代表している点にある。理論的構成の一義性も亦そこに基く。

べての人間の善意と努力とを幻想化し拵拵させるそのように強力な人口の作用を假りにもし「人口悪」の思想とよぶとすれば、このような「人口悪」思想は確かに当時の支配階級の時代感覚を代表したものであった。それは生長しゆく資本主義の合理主義的精神にあって割り切れない時代の姿を集中的に表現するところの一つの時代感覚であつたといつてよいのである。そういうわけで、そのような「人口悪」の思想は、一八世紀の中葉以降すでにマルサスに先立ち、フランスでは重農学派の巨匠ケネーによって、またドイツでは史家メーザーによって代表されていたものである。重農学派の成立史上に名高いケネーと老ミラポールの邂逅のエピソード、老ミラポールをして爾來重農学派の熱烈な信奉者に転身させるに到つたという物語りもこの人口思想に関係しており、時代の人口思想の推移を回顧するに格好な劇的事件といえよう。老ミラポールをしてその時まで盲信させていた重商主義的人口観にとつては、人口こそ富の源泉であり、人口の増加は富に先行するものであつた。がケネーの考えるところはこうである、人間は富によってのみ富を獲得しそして増殖することができるわけで、富こそが富と人間とを増加させるのだ。にも拘らず人口の増加は常に富の増加以上に増加しようとする傾向をもつており、そのために如何なるところにも貧困が存在することになると。絶対王政下のフランスに力づく生長しつゝあつた近代社会の動向をさすがにケネーは見あやまらなかつた。マルサスの「人口悪」の思想がこの重農学派の巨匠によつて遺憾なく表明されていることはかれの近代経済学の先達たる地位を一段と裏書きするものともいえよう。しかし重農主義は、まだ封建的外廊をすてきらないブルジョワ社会の経済学であり、開明主義的絶対王政の保護と圧制をまだぬぎすてきれない近代社会の経済理論であつた。とくにそれは当時のフランス王権が油断のできなくなつた都市の商工業ブルジョワジーに代るべき支柱として求めはじめた農村における農業ブ

ルジョワジーの階級的利害を強く反映するところのイデオロギーであつた。重農主義の体系には生産的な農業者階級と不生産的な商業者階級の対立はあつても、資本家と労働者との対立はなお求めがたい。ケネーの天才によつて觸知された近代的「人口悪」の思想が、なおマルサスの場合にみるような理論的一義性と思想的迫力に欠けている理由も亦そこにあるといえよう。そのような近代的階級対立の未成熟からくる理論的一般化の不足はメーザーの場合にあつても亦おなじい。近代的「人口悪」思想の著作権はどこまでも産業革命下のイギリスが生んだマルサスのものである。

アダム・スミスがなお極めて楽天的な考えをもつていたことについてはすでにふれた。人口の推移はもっぱら労働需要の推移に過不足なく順応するものと考えられ、人口問題は完膚なく経済学的諸條件の支配下にあるものと考えられていたことになる。リカアドもまた人口の動きを無限に再生産の可能な商品生産の一種として考えようとする強い理論的志向を示している。ガリカアドの心を悩ました産業資本の運命とりわけ利潤率低下の問題は、すでに資本主義経済の体制的矛盾への自省の先駆であつた。それはなお産業資本家階級と土地貴族階級との利害の対立を背景とした分配論的理論をこえたものではなかつたが、地代を騰貴させる農産物価格の騰貴、名目的労賃の上昇はめざましい資本の集積裡にいよいよ増大しゆく労働階級人口の苦悩を資本家的意識の中で反映するところの時代の問題であつた。スミスの「国富論」、詳しくは諸国民の富の原因に関する研究に代つて、時代はむしむ諸国民の貧乏の原因に関する弁明、即ちマルサス「人口論」を要求していたのである。人口の動きはもはや楽天的な経済的合理主義で割り切れない様態をしめしてきた。労働者は他のすべての商品と同じようにその過不及を調整され、その過大な増加は死亡率の上昇によつてたやすく剪除されるといったような考えはすでに現象的にも納得しがたいものとなつてきた。スミ

スにはじまる古典経済学は人口の問題をその学問的体系の外部に放り出さなければならなくなってきていたわけで、そこになお経済学者として立つ以前の青年マルサスの「人口論」出現の歴史的意義があり、その「人口悪」思想の社会的背景もあるといえよう。

しかし古典経済学の埒外で形成された「人口の原理」はもともと古典経済学自身がその体系的統一を固持するために必要とした体系的原理であった。それは、同じくその頃（一八一五年）ウェストによって再び定式づけられた土地収穫逓減の法則とあわせて、古典経済学の完成者リカアドの名著「経済学及び課税の原理」（一八一七年）の中でその分配論の根本前提として取りいれられた。利潤率の低下や地代の増大を必至とする、産業資本にとって心痛の諸傾向は、リカアドによって、人口原理と土地法則を自明の前提として論証せられることになったのである。人口は増加するがその生存に必要な追加農産物は土地収穫逓減法則に支配せられてその価値を騰貴させる。その結果が利潤率の低下や地代の増大という産業資本家にとって極めて悲観的な傾向を必然化すると考えられたわけで、マルサスが資本家の合理性の限界に覚知した人口悪の思想は徹底して産業資本家階級の理論的代弁者であったリカアドによって資本主義経済法則の合理的認識にとっても不可欠な根本前提の一つとして攝取され再認識されたことになる。利潤率の低下傾向を資本の有機的構成の高度化から、いゝかえれば資本主義経済の運動法則から理解することは、人口の推移をも資本主義経済の諸条件下に反省しようとする努力とともに、なおブルジョワ的思惟の埒をこえた仕事であったが、それだけに社会経済的諸条件から掬象された人口の動きは古典経済学的・ブルジョワ的合理性を堅持し限界づけるために欠くことのできない根本要因の一つとして強くとりあげられたことになる。そういうわけで、マルサス人口論はリカアドを介して古典経済学に不可欠の一礎石となったといつてよく、ジョン・スチュアート・ミ

ルの「経済学原理」（一八四八年）に到っては既に全く動かしがたい自明な公理としてブルジョワ経済学の常識化するに到った。

（五） 所謂楽観論者の反対

マルサスの人口論がリカアドからミルへとブルジョワ経済学に不可欠の支柱に仕上げられてゆくおよそ一九世紀前半期の間にもマルサス人口論に対する異議と反駁とは特にイギリスの経済学者たちの間にも跡をたゞなかつた。しかし人口論史上「楽観主義者」とよばれるこれらの人々の議論は、マルサス人口論がことさらに軽視した問題面を指摘するに役立ちはしたが、マルサス人口論の根本をゆるがすに足るものであったとはいえないようである。これらの諸論争についてはわたくしは詳しく原典を考証する便宜も興味ももちあわせないが、南亮三郎氏の詳博な諸研究その他によって想像してみてもその程度を超えないものようである。例えばグレイ（「国々の幸福」「グレイ対マルサス」）やサドラー（「人口の法則」「一八一五年」）の場合にみられるように人口の増加が実際に生存資料の増大をよびおこす有効因として働く面に注目することはよいとしても、これをかれらの考えるように反マルサス的な一般原則として主張しうるかどうかはうたがわしい。またアリソン（「人口の原理」「一八四〇年」）の場合にみるように経済の発達段階によって人口原理の作用の根本的に相違することを指摘し、農業の余剰生産の成立以来、社会の進歩につれて人間は自分自身を扶養する以上の能力をもっていることをいよ／＼明瞭に実証してきていることを力説するのはよいとしても、だからといって生産の力は人口の力を超えているという根本原則が成り立つかどうかは問題である。人口を経済から抽象し、それと対立させたマルサスの図式の上で議論をしているかぎり、マルサスの原則を逆転することはもともと不可能だといつてよいのである。

また、人口増加の社会階級別にみた差別相が注目の対象となった

こともこれらの論者の多くに共通な特徴であったが、それも上層富裕階級の低い増殖力の中にマルサスの人口論の一種の反対作用を予感する程度のもので、議論の重点はむしろ下層階級の人口圧力の中に国民的繁栄の原動力をみようとすする皮相な楽観主義的主張の域をこえたものではないようである。その点グラム（人口原理の所）や上掲アリソンの所説に特に著しい。人為的な人口調整については寧ろ当時の共産主義的社會主義者トムソン（「人間を最も幸福にする富の分配」の原理に關する研究一八三四年）が労働搾取のない平等社會での思慮深い抑制作用の可能をとりてマルサスの人口論が画き出したような階級社會における過剰人口の形而上学的な一般化に反対している態度の方が遙かに理論的一貫性においてまさっていよう。ただマルサス人口論の主張はあまりに反民衆的であつたし、それに資本主義の發展自身が過剰人口の恒常的な存在を必要としたことをおもふと、ブルジョワ經濟學の内部でのこれらの反マルサスの抗弁の存在理由も亦おのずから了解せられよう。時代の人口思想の本流はやはりどこまでもマルサスの側にあつたといつてよいのである。

三、古典經濟學への抗議と批判

近代的過剰人口の經濟學的反省

(一) シモンド・ド・シスモンディ

古典經濟學の不拔の一礎石となつたマルサス人口論に対する最初の急所を衝いた懷疑と抗議はシモンド・ド・シスモンディの名と結びついている。シスモンディはリカアドやマルサスと同時代人として一九世紀初葉のフランスに生活したが、かれの思想を理解するにはかれの生國スイスの当時の世相についても一瞥を投じておく必要がある。そこでもイギリスの産業革命とフランスの政治革命を中心とする時代の波は明暗の兩相を兼ねて押しよせていた。封建制度と

寡頭政治に反抗して漸く平穩な小市民的生活権をたゞかいたつたばかりのスイスの近代小市民たちにとっては、新しく押しよせてきた資本の力は旧にまさる強暴な暴力としてかれらの生活を脅かしはじめていた。そしてシスモンディも亦この時代の苦惱を強く經驗した裕福な小市民の子として育つたのである。それにシスモンディがその思想的成熟期に自ら見出した当時のイギリスにあっては生産力の飛躍的な發展がその避けがたい運命としてくりかえし深刻な恐慌をよびおこしていた。國富の異常な増進が却つて労働者階級の窮乏を深化させるといふ資本主義的生産に不可分な矛盾が多感なシスモンディに深い影響をあたえたであろうことは不思議でない。そのような人間の懷疑を古典經濟學に対する抗議として理論的に成熟させるに到つてからのシスモンディはこの矛盾の根源を自由競争による生産の無制限な増大にありとし、消費との均衡を無視した資本の自由な運動に抗議するに到つた。一八一九年に上梓した「經濟學新原理、一名富と人口との關係」はそのような思想的成熟を物語る新著作で、かれの人口論も亦この中に収められている。ところで資本主義經濟の信條であつた自由主義的政策に対するこの抗議は、人間自身の福祉を忘れた社會的富の増大に対する抗議であり、「富を人間から抽象した」古典經濟學そのものに対する抗議でもあつた。そういうわけで人口問題は、シスモンディにとっては、何よりも労働者階級の窮乏と多産を中心とする過剰人口問題として、古典經濟學の理論的抽象を論難し、彼の經濟思想の妥当性を実証する焦点的論点としてとりあげられるに到つた。マルサス人口論への抗議と批判はおよそそのような社會經濟史的情況とどのような人間の関心を背景として始めてその本格的な展開の第一歩をふみ出すに到つたといえよう。

シスモンディは何よりもまずマルサス人口論の空疎な自然主義的抽象に抗議し、現實の人口増加は常に必ず特定の歴史的社會的諸

條件の下でのみ実現されるものでなければならぬことを強く主張している。マルサス流の抽象論を駁るならば人間の食物となる動植物は人間以上に比類のない増殖傾向をもっているではないかといっている。現実の人口の動きはどこまでも社会経済的な諸関係の中でのみ促進もされ、ば抑制もされるものでなければならぬ、いゝかえれば社会経済的必要によってどこまでも合理的に規制された現象でなければならぬ。そういうわけで、人口の増加は完全に所得によって規制されねばならぬという命題をシスモンディは問題分析の根本前提として強くとりあげた。それは嘗てアダム・スミスも語ったところで、問題の経済学的分析に当然の観点ではあるが、しかし労働者階級の窮乏と多産という眼前の事実はこの命題の一義的な適用を拒否していた。マルサスの人口論が人口増加の本体を経済学的合理性の埒外に捨象し、過当な多産こそが人類窮乏の真因だったのも亦そのためであるが、この窮乏下の労働者階級の多産は、シスモンディにとっては、新しい資本主義社会が作りだした新しい現象として、安定した共同社会の中で安定した所得によって子供数を合理的に規制していた旧時代の小生産者たちの生活と鋭く対照された。国民経済的な広がりをもつに到った労働市場の成立や周期的な景気の変動は労働者たちに自分の正常な所得を考慮させるに十分な社会的見透しを不可能にしてしまつたし、またその極端な窮乏はかれらに所得に準じた子供数の調制を行わせるに必要な人間的教養をさえ不可能にしてしまった。だから、多産が窮乏を生むのではない、むしろ窮乏が多産を、そして過剰人口を生むのだというシスモンディの反マルサスの結論がでてくる。そういうわけで、眼前の過剰人口は労働者階級の多産から生まれるに相違ないが、この多産は彼らの階級的窮乏から、いゝかえれば資本主義的生産の本質、自由競争による生産のための生産の増大、大衆的福祉を顧慮するところのない生産様式の矛盾から生まれてくることになる。人口問題がシスモンディ

イにおいて現存経済体制への抗議の傍証となり、「一富を人間から抽象した」古典経済学への抗議の中心的論点としてとりあげられた理由はそこにある。近代的過剰人口の資本主義的必然性に対する反省はこゝに最初の本格的な理論的究明の端緒をみるに到ったといつてよいのである。

尤も、シスモンディの現存社会経済体制に対する抗議は、その生地ジュネーブの小市民たちの時代感覚とおなじく、どこまでも小市民階級の立場を背景としたものであつた。その人口論中狭隘な市場関係の中で正確な見透しと安定した所得とによって生産し生活している小市民たちがその子孫の数を調節することによって過剰人口の苦惱から解放されていたことをといて、これを近代労働者階級の状態と強く対照させていることなどもその階級的立場を示すに遺憾のないものといえよう。シスモンディを小ブルジョワジーの典型的な階級的イデオログとし、その経済思想を経済学的浪漫主義として格づけけたレーニンの断定は決定的である。資本主義的生産方法の背負うていた歴史的な意義と使命とについてシスモンディは全く無感症であつたといつてもよいのである。ただ資本主義のその後の発展は労働者階級の生活水準をも次第に上昇させるに十分であつたし、そのような労働者階級の人間的上とも表裏して近代資本主義社会は広汎な近代小市民階級層を成立させた。そしてシスモンディが浪漫主義的回想の中に愛惜した市民的教養としての産見の制限はこの新しい近代小市民階級層の生長につれて再びその後の人口の推移に大きな影響をもつてくるようになる。そういういみではシスモンディの人口論は今日もなお一つの大きな社会的志向の中で生きているといつてもよいのである。現存社会経済体制に対するその抗議はうたがひもなく回顧的反動的な階級的志向を背景としたものではあつたが、しかしまた広く人道主義的思想にまで成熟した近代小市民の生活感覚を代弁するに値いするものでもあつた。そしてその理

論的意義と価値とはそのような近代小市民階級層の階級的存在理由そのものとその運命をとにもするものといってもよいとおもう。

しかし、シスモンディの人口理論が今日の小市民階級層の中になお生きているといっても、それは所謂新マルサス主義の理論とは全く別のものである。新マルサス主義も亦この新しい近代小市民階級層の生長をその社会経済的背景としてもってはいるが、しかしそれは小市民的な立場からするマルサス人口思想の実際的な修正と応用を中心としたものである。それはどこまでもマルサスの人口原理を前提しながら、人口を直接に食物とよりも寧ろ資本と対立させ、わかり易い労賃基金論的説明を抛りどころとして、労働階級の窮乏回避の唯一最善の方策を労働者自身の供給の制限、即ち産見の制限に求めようとするものである。新マルサス主義がその後一九世紀の後葉に大衆生活の中で実践されるようになったところにはこのような階級的力点を棄て、人口一般の窮乏回避のための個人的適応方策と考えられるようになったが、マルサスの抽象はそれだけ一そうはつきりしてきたといえよう。つまりマルサスのといった道德的抑制、即ち禁慾的な結婚延期の方法のかわりに寧ろ早婚と結婚後の避妊とをすすめるのが文献史的には早くプレースの「人口原理の論証」(一八二二年)にはじめる新マルサス主義思想の要旨である。人口理論としては人口と資本との関係を強く前面にもち出したことよりもマルサスの人口原理をどこまでも根本前提としているところに本来の趣旨があり、資本主義体制自体に対する理論的反省は微塵も求め難い。それはむしろ現存社会に対する個人々々の立場からの順応運動の必要と効用を説教するもので、そのような伝承的權威に対する懷疑に欠けている。小市民階級の立場を深くユマニテの思想にまで反省し、近代的過剰人口の本質に社会経済的分析のメスを入れたシスモンディの仕事が近代人口論史上に占める地位は全く別のものでなければならぬ。

(二) カール・マルクス

シスモンディによって表明された古典経済学それ自身の懷疑、資本主義的経済体制に対する批判の精神を生長しゆく労働者階級の立場から継承し新しく押し進めたものはカール・マルクスであった。すでに「経済学批判」(一八五九年)の序説の中でマルクスは方法論的解説の一例として「人口」をとりあげ、一般に政治経済的考察が全社会的生産行為の基礎としてまた主体として好んでとりあげるところの「人口」という概念もこれを組みたて、いる階級的構成を離れては全くの抽象物であり、この階級的構成もまた賃労働、資本などの構成要素を抜きにして一の空語にすぎないことを力説しているが、「資本論」第一巻(一八六七年)においては人口法則の歴史社会的特性を唯物史観の立場から更に強く力説するとともに、とくに近代社会における過剰人口の本質を資本蓄積の法則から一段と精細に分析した。マルクスによれば、時代々々によって異なる独特の史的生産方法はそれぞれに固有な、それぞれ歴史的に妥当する人口法則をもっており、抽象的な人口法則一般というよなものはただ動植物界について、それも人間が歴史的に干渉しないかぎりにおいて存在するものにすぎぬ。そういうわけで、近代社会に特有な過剰人口の本質は資本の運動法則、とりわけその蓄積の法則から反省されねばならぬ。資本主義的生産の発展、資本蓄積過程の進行は資本の有機的構成の高度化を楨杆として推進される。いゝかえれば、生産手段に充たされる資本部分が労働力の雇傭に当てられる資本部分よりもたえず加速的に増大してゆく。前者は新しく価値を増殖しないという意味で、不変資本とよばれ、価値増殖の源泉に当てられる部分は可変資本とよばれたが、総資本の飛躍的な増大過程は総資本に対する可変資本部分の比重をそれだけ急速に低下させる。可変資本部分のこの相対的且つ加速度的な減退傾向は資本の全般的な発展水準から

みて過剰な労働人口をたえず生み出すことになる。それが労働者人口は生来過大な増殖傾向をもっているかのような外観を呈せしめるのだというのがマルクスの主張の要旨である。いゝかれば、われわれが人間生来の過大な増殖傾向の結果としてうけとり易い眼前の過剰人口とは実は資本主義的生産方法が人口の自然増加とは独立に生み出すところの失業者群のことであって、それは資本主義がその早急大量の労働需要に備えるためにも、また労働需給の法則を資本に都合のよいように貫徹するためにも、必要な産業予備軍のことになる。即ち資本主義は自ら自分の必要とする過剰人口を作り出すわけで、そこに労働需要が人口の自然増加の限界につき当ったマニユファクチュア時代と対照する機械工業時代の資本主義的人口法則があり、近代資本主義社会の過剰人口の社会経済的本質があることになる。

マルサス主義の立場からするマルクス批判は今日にいたるまで跡をたゞぬ。その反批判のどれもが一致して語るところはおよそこうである。たとえマルクスの所論を一応は承認するとしても、それは結局失業人口に関する分析であって人間の過大な増殖傾向一般の問題にはふれていないばかりでなく、マルクスの所論自身が暗に労働者人口の生来的な過大な増殖傾向を前提としているではないかと。たしかにマルクス自身も、労働者階級の不断の保存と再生産は資本の再生産のために必須な条件であるが、資本家はこの条件の成就を安んじて労働者の自己保存衝動と繁殖衝動とに委ねることができ、ただ労働者たちの個人的消費をできるだけ生活必需品に限定することに気をくばるだけでよいという意味のことをいっている。いゝかえれば、人間はほっておいても殖えすぎて困るものだという事実を暗黙の前提としているようにもみえる。しかしこれはどこまでも個々の資本家の立場に立っての一応の記述である。史的唯物論の立場からの解釋は当然にまた別なものでなければならぬ。自然生物学的な増

殖傾向と考えられるものも亦ふかく歴史的社会的な制約をうけたものでなければならぬ。そして可変資本部分の相対的減退傾向を必然化しながらも飛躍的に進行する資本の蓄積、社会的富のめざましい増大こそ近代社会の人口収容力を異常に拡大し、労働者大衆に安んじてその増殖衝動を發展させた根本の条件であったといつてよい。

近代的な人口増加も、近代的な過剰人口も、ともにそこから生まれたものであった。シスモンディが注目した近代的労働市場の性格や正常な所得の見とおしの欠除などもそのような基本的条件に随伴する社会的諸条件の一環だといえよう。マルクスも労働者家族の大いさが労賃の高さと逆比例する傾向に注意してこれを資本主義社会の法則といふ、この資本主義社会の法則は野蕃人の間や若しくは開けた植民地では狂気の沙汰と考えられるだろうといっているが、そういう主張の真意が近代的窮乏が生む多産と、総じて人口の推移そのものの歴史的な制約性を指摘したものであることはいうまでもない。また労働者人口が急速に増殖しながら急速に消耗してゆく労働者世代の急速な交替過程について語っている真意も納得せられよう。そして人口現象のそのような歴史的発現形態が考慮される以上、マルクスの過剰人口論は失業人口論にすぎぬという批評もまた同時に解せねばならぬ。それが顕在すると否とを問わず失業人口としてとらえられることによってこそ近代社会における過剰人口ははじめて科学的な分析の対象となるといつてよいのである。社会主義には人口論がないというラング以来の慣用の批難は経済学的分析の圏外に前提されるような人口論の存在を求め論者の批難であり、史的唯物論的視角からするその全面的な展開がなおマルクスに欠けているということは暗にマルサス人口論を前提としているということと決して同じではない。近代的過剰人口の史的本質と必然性の分析はマルクスに到つて資本主義経済体制の核心点から論証されたばかりでなく、そのような経済社会における人口現象の気違いじみた歴史的

様態も亦ひろく史的唯物論的世界観を背景として鋭く注視されるに到つたといつてよいのである。マルサス人口論にあらゆる意味で対蹠的な社会主義的人口理論の基礎も亦こゝに据えられたといつてよい。時代は労働者階級の階級的自覚と闘争の高潮期であつた。

(三) その後の社会主義的人口論

マルクスのしとげた仕事を律鑑とするマルクス主義社会主義者たちのその後の所論には誤解され易い偏向や逸脱を別にしてはその方法的態度においても亦その理論的分析の深さにおいてもマルクスに更につけ加えるべきものはあまりないといつてよい。が社会主義的人口論として一般にとくに強く印象づけられるようになった思想的傾向はその極端に樂觀主義的な人類社会の未來像で、それはすでにマルクスの協同者であつたエンゲルスからはじまるといえる。將來社会主義社会は科学や技術の進歩とその利用を今日の階級社会的制肘から解放してわれわれの生活空間を再び劃時代的に拡大するであらうといふこと、とくにマルクス主義が最後の拠りどころとする土地収獲遞減の法則も無制限な科学の進歩によって十分に補償されるであらうといふこと、そして万一マルサスの考えるような強大な人口増殖力がなお杞憂のたねとなるとしても將來社会主義社会においてのみ始めて実現されるであらう大衆の文化的向上こそこの増殖本能の道徳的抑制を可能にするものとなるというのが、すでにエンゲルスの達意な文筆によって素描され、その後の諸家の所論の中にくりかえし再説された社会主義的人口論のとりわけ世俗的な表象といえよう。それは社会主義の傾向的志向を啓蒙するのに大きな役目をもつていたことはいないが、論争に通有な一面的な誇張に墮した憾みもないではない。

傾向的論議はそのように型にはまったものであつたが、その間多少の理論的波紋はないでもなかつた。社会主義思想の大衆的普及に

貢献するところの多かつたベーベルの名著「婦人と社会主義」(一八七九年)は人口問題にも関説するところが多く、過剰人口の亡霊は惣じて社会体制の転換期にあらわれる歴史的現象で、マルサス人口論も亦おなじく富の異常な増大過程の中で進行する大衆の貧民化過程を説明するためにあみ出された支配階級の理論だとして、典型的な社会主義的人口論を展開しているが、その中でベーベルは將來社会における過剰人口の杞憂を論駁する一傍証として榮養の向上とともに妊孕力の低下する事実をあげ、古代バビロンの農民たちの低出産力も脂肪の多すぎた榮養の所為だとし、また蜜蜂についての実験などをあげて、榮養のとり方によってだけでも人口数は顯著に統制せられることができようといつている。この事実を指摘した當時の生物学者ブリュクナーの所説にはすでにマルクス自身も関心をよせていたが、このような議論が社会主義人口論にとって果して本筋のものであるかどうかはうたがわしい。それに、極端に過大な榮養の場合をのぞいて、生活の潤沢化はむしろ妊孕率を高めると考へる方がより妥当で、それは後にカウツキーもその人口論の根本思想の一つとしてとり入れたところである。社会主義的人口論の本領はどこまでも問題の社会経済の本質をあばきだすところになければなるまい。われわれがた易く自然の宿命として表象するところのものをどこまでも歴史的な成果としてその社会的経済的諸制約の中で再構成してみせるところになければならぬ。

そういう意味でも、社会主義的人口論のその後の推移の中でもっとも理論的に価値ある論議は土地収獲遞減の法則を主題として行われた人口理論上の葛藤であらう。この法則はすでにマルサス人口論の暗黙の前提であつたが、とくにリカード以降マルサス人口論と並んでブルジョワ経済学の一基礎となつたもので、マルクス主義社会主義者中マルサス人口論に降服した二〇世紀の修正主義者の多くもつまりはこの土地法則を承認するところにはじまつていゝといつて

もよいのである。自然生物的な過大増殖傾向と土地収獲の遞減傾向とはマルサス人口論の二つの理論的核心点で、同時にまたブルジョワ経済学、いゝかえればブルジョワの合理性の限界点に立つ二つの理論的前提でもあったものである。そういうわけで以下章あらためてその論難論議の跡をあわせ窺うこととする。

四、自然主義的世界観への抗議——過大増殖傾向の生物学的再吟味と土地収獲遞減法則の社会主義的批判

(一) 自然主義的世界観再吟味の意味

マルサス人口論に対する抗議と批判は近代的過剰人口の社会的、経済的な本質を曝露することにつきるといってよいが、しかしこのような理論的志向は、人口問題の本質をどこまでもその歴史的な特性の中にとらえようとする努力として、マルサス人口論の思想的背景をなす自然主義的世界像に対する抗議と批判にまで進まねばなるまい。人口問題の理論的反省は当然にそのような世界観的背景の省察を余儀なくさせるのである。

自分で自分の生活空間を拡大し改善してゆくこと、序章にも述べたように、そこに人類という新しい生物種が自然界にその自然的存在権を確立することができた最初の行為があり、人間の全社会史を生物進化の全自然史的発展と截別しこれと対立させる本質的な差別点がある。人間の自然生物的な本能と考えられるものでさえ悠久な人間の行為の集積を媒介とする歴史的、社会的な成果として始めて人間の自然としての存在を保証されているのである。だから、人間の作為のすべては結局は常に新しい自然として再現されるところに最後の目標をもっているのだといった方が一そう適切であるかもし

れない。と同時に、人間の努力の欠陥と不足が不可抗力的な自然的障害として表象されがちな理由も亦そこにあろう。理論的反省のつとめはそのような日常的觀念に抗議し、人間の作為の欠陥と不足をまさしくわれわれ自身の作為の不足として自省するところにこそなければならぬ。それがまた自然の新しい相貌をうきたゞせ、本當の自然を再発見する道でもあるのである。

近代的過剰人口の社会的、経済的な起因はシスモンディやマルクスの指摘したとおりである。そのような諸条件から抽象して過剰人口の本質を專一に自然生物学的な不可抗力性に帰着させたマルサス人口論の階級的志向は蔽うべくもない。しかし、マルサス人口論が生物界一般の事実として憑拠するところの人間の過大増殖傾向そのものについては異論をさしはさむ余地はないではないかと、そうマルサス主義者は抗弁するのが普通である。しかし科学というものも人間の、勝れぬ人間のな一つの在り方であると考えられるかぎり、自然科学的事象の要稟する理論的な客観性も人間自身の主体的な行動性を離れたものではない。それはただより大きな行動的目的のために日常的な実用を離れるだけである。自然科学的に儀装された自然像も大きな時代の動向から独立したものではなく、当然に不断的修正と吟味に曝されるものでなければならぬ。とくに自然科学的理論が社会科学の中に援用される場合には些少な世界観的色調の相異もその影響するところは決して軽くないのである。

(二) 過大増殖傾向の生物学的再吟味

一九世紀の中葉、丁度マルサスの人口論がジョン・スチュアート・ミルの「経済学原理」(一八四八年)によってブルジョワ経済学に不拔の地位を与えられるようになった時代に、マルサス人口論の生物学的前提に対する異議も亦はじめて提出されるに到った。その一つはダブルデーの「特に食物との関係からみた真の人口法則」(一

八四一年)であり、つゞいてはスペンサーの「動物妊孕力の一般法則から導かれた人口の一般論」(一八五二年、後に「生物学原理」第二巻に収録)であった。この二人によってしとげられたマルサスの自然像の修正は、生物的自然と人類社会との本質的な差異を一段と注目させ、マルサス人口論の自然主義的な思考法に深い反省の機縁を提供したというみで近代人口理論の発展に貢献した役割りは極めて大きい。

ダブルデーの説くところの大意はおよそ次のようである。動植物界を通じて、すべて種属の保存が危険にさらされるとおのずから妊孕力が高くなる。とくにそれは栄養の減少する場合にいちじるしい。この普遍的な法則は人類の場合にも適用されねばならぬ。したがって貧しい人々の間にみられる強い増殖力と富裕者階級にみられる人口減少の傾向も亦この自然法則の一環をなすものに外ならない。人類社会における階級間の差別出生率までも普遍的な自然生物学的法則の一環として説明し切ってしまうてよいかどうかは別として、不断に生存資料の限度をこえようとする生物一般の増殖傾向、即ち普通に過大増殖傾向と考えられるものが実はそれぞれの種属の当面している生命の危険に対応するものであるということ、いゝかえれば各種属の妊孕力はその環境に対して過大であるよりも寧ろ正確に適應し均衡を保持しているものであるということ、またそのような均衡を實現しなければ生物として存続しえないものだという考え方は、後に社会主義者カウツキーの人口論中にも強くとりあげられたところで、自然生物学的説明として確かにより合理的であるばかりでなく、とくにそれが人類社会史の自然史的背景としてとりあげられる場合の世界観の相違は無視しがたい。自然の秩序がもし人類社会にとっても人間的作為を媒介として再現せらるべき理想であるならば、過剰人口はむしろ人類社会の社会的欠陥に伴う反則的な現象とも考えられることになるわけで、少くとも動物的な過

大増殖傾向に人間の全社会史を支配させる必要はなくなるわけである。

ダブルデーの所論の中には勿論いろ／＼の難点はある。妊孕力の環境的危険に対する適應関係を単に栄養の問題だけから論証しようとするにも多大の問題がある。が生物、とくに人間の妊孕力が固定したものではなく、環境に応じて変易する適應性をもったものだという考えが人口理論の構成に大きな暗示をあてるものであったことは否定しがたい。そしてダブルデーが主として食物との対応関係において指摘した生物妊孕力の適應性の問題はスペンサーによって更に一段と生物学的に妥当な形で説明されるに到った。

スペンサーの所論はこうである。環境の危険が一定であればこれに対応する生物種の能力もまた一定となるが、この対応力は個体の生を保持する力と種の増殖の力との二つの要素からなりたっており、しかもこの二要素は互に他を犠牲にして逆比例的に増減する。したがって個体化の傾向をいよく強くする生物進化の過程は当然に種の増殖力の減退を必至とすることになるわけで、それは神経組織を特段に発達させてゆく人間の場合にとくにいちじるしい。人類の妊孕力も亦その進化につれて次第に低下せねばならない。

尤もスペンサー自身はこの個体化と種の増殖との背反関係を単に傾向的な法則としており、したがって実際には種の増殖力は個体化の進むほど急速には減退せず、むしろ環境に最も適應したすべての高等動物はすべて多少とも地上を支配しようとする傾向をもっていること、そしてとくに人間の場合それは人口の圧力として不滅の意味をもっているものであることを主張している。いゝかえればこの妊孕力の超過こそが人類進化の原因であり、そしてこの進化がその妊孕力の低下を必然化するというわけになる。そういうわけでスペンサーの所論にはマルサス人口論に一部同調するよなところもあるわけであるが、人間の妊孕力の可変性を生理学的に説明しようとし

た点においてはダブルデーの仕事と並んで人口理論の發展史上素通りすることのできない一見だといってよいものである。

専門的な異論はこゝでも勿論ないではない。例えばスペンサーのいう個体化と種の増殖との背反関係は個体の摂取するエネルギーの総量が不変のものであるかぎり正しいが、この前提そのものに考慮の余地があるといったような批評もその一つである。科学的分析の仕事には勿論これによいという際限はないが、スペンサー自身は右の関係を蓋然的な傾向的法則としてとりあげているわけで、そういういみでこそまたそれは近代人口理論の推移無視することのできない大きな意義をもっているのである。そして無意味な浪費ともみえる生物の強大な増殖傾向が現象的には確かに過大な増殖力の濫費としてあらわれるにせよ、その本質においては寧ろ自然の均衡を実現する生物的適應作用の結果だということ、いゝかえれば無意味にみえる現象形態の底に合理的な本質的作用がはたらいていることをこれらの生物学的所論は再省させるに十分なのである。それに時代は一九世紀の中葉、産業革命期の波瀾をすぎた近代産業資本の自由な發展期にはいつており、往年の殺人的な高死亡率も漸く近代的な低下の足どりを刻印しはじめたときである。そのような生活環境の改善を背景として生物の過大增殖を規制する力を無意味な死亡淘汰的作用をこえたより本質的な自然必然性の中にみようとすると試みがありあげられたことは決して意味のないことではない。

スペンサーの思想はその後の社会科学的思想の中に今日にいたるまで強い影響を与えている。やゝ神学的粉飾が強かったが主として社会科学の見地からマルサスの自然像に抗議した最初の人はケリーであった。「社会科学の諸原理」(一八七七年)。彼は神の造った自然の中には増大しゆく人口の需要と嗜好に食料やその他の原料が適應してゆく単純で美しい法則がはたらいていることをといてマルサス人口論に強く反対すると共に、人類社会におけるその破綻を諷れる

經濟政策の結果に歸している。ケリーによれば、生物の妊孕力はその進化の段階と逆比例の関係にある。それは微生物の繁殖力と高等動物たとえば象などの長い妊孕期間や少ない子供数を較べてみるだけでもその一斑を察しられる。人間も生物進化の頂上に立つ生物として最低の妊孕率をもっているが、人間が野蠻と孤立から結合と文明へ、いゝかえれば本當に人間らしい生活へ進むときもこの神の企図には例外はない。人間の再生産機能は人間有機体の一部として、氣候や健康、教育、職業、生活習俗の影響下にあり、人間の増殖力も決して動きのとれない固定量ではない。人類社会の進化は人口の増加につれて社会的協同を強くし、自然を支配する力を増して労働能率を向上させてゆくが、それは生活資源の増大とその多角的利用を可能にするとともに、他方には機械の發明による筋肉力の節約を通じて必要補給栄養量を減少させまた思考能力の發達を通じて妊孕力を低下させ、人口増加速度を緩慢化させてゆく。眞の文明の進歩は神の企図した自然の調和を再現するに足るものでなければならぬ。そういうわけでの楷調の破壊は、ケリーにとっては、ひとえに人間のなものであり、人間を眞の人間に、いゝかえれば自己責任的な存在にまで進化させない制度の罪であることになる。この理想は經濟政策的には土地の分割とその大衆的な所有、農業の科学的運営と農工生産物の價格の均衡保持などによつて實現せらるべきもので、イギリスの人口苦悶は、ケリーからみると、ひとえに資本の集中、農業の破滅、商業の独裁など一連の事情にその責めを歸せらるべきものとなる。そのような經濟政策論の当否はこゝでは問わぬ。かれの土地收獲遞減法則に対する実証的反対主張と同じく、それらは当時のアメリカを論拠に立論されたものであるが、新しい社会科学的思想が新しい自然觀と表裏して形成されてゆく一つ事例として人口論史上一応はふれておかねばならないものであらう。

このような方法論的態度は後にカウツキーの人口論著「自然と社

会における増殖及び發展」(一九一〇年)に一段と純粹にあらわれるに到つたもので、カウツキーはそこで自然生物界に自然必然的に貫徹されるところの自然の均衡、環境の危険に対する種の増殖力の適應作用を強く力説するとともに、人類社会の成立はこの均衡を人為的に攪乱しはじめること、とくに人類の妊孕力のその社会環境に対する不適応が人類社会に特有な現象であることを指摘してそれがとくに階級社会の階級的矛盾を基軸として展開せられるものであることを論じている。そしてカウツキーによればたゞ將來社会主義社会においてのみ、生活空間の再度の劃時代的な拡大とあわせて、過剰人口を抑制するに足る社会経済的諸條件、とりわけ婦人の解放と社会倫理的感覚の異常な強化は可能であり、人口問題の最後の解決も亦はじめて期待しうるものとされている。カウツキーの右の人口論作は史的唯物論の立場から人口問題を全面的にとりあげた唯一の論策として特異のものであるが、それだけその細部の当否については社会主義陣營の中からも多くの異論があろう。こゝではたゞマルサスにとつては極端に浪費的で無意味なものに見えた生物的自然が暴力的だが自然必然的な自然の均衡によって貫かれており、人類社会における均衡の破綻はむしろわれわれ自身の社会的作為に歸すべきものであることが体系的な迫力を以て表明されるに到っていることを注意するにとゞめる。現存社会の欠陥を自省しその合理的な改革を要望する精神的志向が同時に合理的自然を発見したのだといつてもよく、自然はわれわれ自身の社会的志向にそつてその姿態をかえるといつてもよからう。そして自然と社会の境界線上におかれた人口の自然生物学的増殖力が自然の暴力として社会の外に追い出され社会的限定の圏外にある不可抗力的要因として対峙させられるのもまた社会自身の体制的矛盾がひきおこす社会的錯綜の結果であるといつてよいであらう。

(三) 「土地収獲遞減の法則」に関する論争

社会自身の体制的矛盾を社会と自然との抽象的な対立に移しかえ、人間の作為の不足や欠陥に歸責すべき歴史的事実を却つて自然法則的事実として普遍化しようとする傾向は、總じて人間の思考に固有の安易な態度であるが、人口理論の中ではいわゆる「土地収獲遞減の法則」にかゝる論争の中に再度反省を余儀なくされる第二の焦点的な問題点をもっている。自然法則的に普遍化されたこの土地法則は人類社会における過剰人口の宿命性をとくに極めて好便なものであり、事実またそれはマルサスの人口論の根本前提の一つであつたものである。土地はその空間的ひろがりには限度があるばかりでなく、労働や資本をこれに追加してもその増投の割合だけ土地生産物は増加しないという経験的事実が公理的に自明な自然法則的事実として定式化されたわけで、それが「土地収獲遞減の法則」とよばれるものである。近代人口理論のブルジョワ的主流を貫く自然主義的思考法はこの法則に最も説得力のつよい理論的拠点をもっているといつてもよく、マルサス主義社会主義者の中から出た修正主義的偏向もこの土地法則を承認することにその理論的弁明の途を見出したことは前段にもふれたとおりである。それだけこの土地法則は人口理論における世界觀的前提の相違と思考法の差異をみるのに格好な焦点的論点だといつてよい。

すでにマルクスは「資本論」第三卷に差額地代を論ずるに際してこの問題の論究に決定的分析を与えている。というのはマルクスは差額地代の第二型、即ち農業技術の進歩につれての經營集約化的過程の下で發生する差額地代の諸形態を分析することによってリカードの考えたような費用の生産性遞減の場合が単にその可能な一つの場合にすぎないことを明らかにしているからである。それは農業生産における費用生産性遞減の不可避性を普遍的な自然法則として主

張する理由がないこと、ましてこの部分的傾向を土地の肥沃度遞減の法則として自然必然化する理由のないことを明らかにしたものと、いってよいものである。そして土地の自然的性質として表象されやすい肥沃度の變化が実は技術的な諸條件と無関係なものではなく、したがって根本においては社会的、経済的な諸條件の變化を反映したものにすぎないことは同じ地代論中マルクスの力説するところである。例えば、肥沃度は土壤の客觀的屬性であるとはいへ、経済的な意味では、常に農業の化学的、機械的な發達の一定の情況とか、わりあいをもっており、そのような發達につれて變化する。そういうわけで経済的にみた場合には労働の生産性の狀況は、土地の化学的構成やその他の自然的屬性と同様に、土壤の自然的肥沃度と考えられるものの一要素をなすものであると。

にもかゝらず土地法則は一貫してブルジョワ経済学の固執するところで、修正主義者の自己弁明の拠りどころともなってきた。そしてそれがどのように固執される一ばんの肝どころはやはり右のような根本の社会的志向にふれるところにあるといえよう。この法則は単に技術的、農学的な見地からは「肥沃度遞減の法則」ともいわれるものではあるが、それは単に植物の生長に必要なさまざまな栄養素の間に適正な一定の比率がなければならぬということ、いゝかえれば与えられた一定の技術および経営組織の下で最大の生産性をうるための技術的限界一般を物語るものにすぎぬ。したがって農業技術の水準がこの適正な比率を実現するように合理化されていなければならぬ場合これらの要素のどれかを強化することは極めて著しい生産性の増大をよびおこすわけで、農業における何か宿命的な生産性遞減を法則化する性質のものでないことはいうまでもない。そういうわけで問題の本質はどこまでも社会経済の見地からのみ論究せらるべきものである。しかしそういう見地からいうと、新しい産業技術の導入、とりわけ新しい経済制度への推移は農業においても

亦その生産諸要素の適正な比重を一新し、労働または資本の増大にともなう生産性の向上を可能にすることになる。しかもレーニンの適切に指摘したとおり、技術の進歩、経営組織の合理化を條件とすることなしには労働や資本を連続的に累加するということは本来意味をなさない事なのである。勿論、労働および資本の追加的投下は与えられた不変の技術的および経済的條件の下でもある程度まで行われ得るし、したがってこの法則はその範圍内においてのみ或る程度まで妥当するが、しかしそれはたゞ技術の不変の狀態が労働および資本の追加的投下に限界を劃するということを意味するにすぎぬ。要之、この法則が一般化しようとする生産性低下の現象は、経済的社会的な諸條件の變化に伴って變化する生産性の向上、停滯または低下の諸相のたゞ一つの部分の場合を示すだけで、なにも農業に特有な普遍的法則として妥当するものではないことになる。したがってブルジョワ経済学の固執する土地法則の真意はそのような部分的現象を一般化し技術の進歩や経営組織の進化を単に偶然的・一時的な附隨的條件として機械的に分離し抽象するところに根ざしている。そして、技術の進歩も経営の進化ももちろん否定はしない。しかしそれらはこの自然法則の作用を単に一時的に補償し延期するだけのことで法則そのものを否定するものではない。

しかし、人間の生物的妊孕力を歴史的・社会的な諸限定の外に抽象することが全く不可能なのと同じように、土地の生産力もまたわれわれにとっては何れわれの社会的、経済的、とりわけ技術的な諸條件の中でこそその自然的實在性を維持しているものである。だからレーニンの指摘したとおり技術の進歩ということを見れば、労働や費用を増投するなどということ自体がもともとおかしなことだといえよう。そのような抽象とその自然主義的永遠化がつかまるどころ農業の技術的立ちおくれを必然化する資本主義経済体制を永遠化しようとする志向と表裏したものであることはいうまでもない。

巨大な自然の抵抗は確かに人間の作為のたどたどしさを痛感させるに十分であろう。しかし自然をあくまでわれわれの技術的作為の中にあるものとして取り上げることが真に科学的でもあり、したがってまた前進的な態度なのである。科学というものは本来そういうものでなければならぬ。科学が地動説を確証してのちもわれわれの感覚的自然の中では太陽はやはり東から出て西に入る。しかしそれだからこそわれわれは太陽が動くのではなくて地球が自転するのだという科学的認識を一そう必要とするのである。

実際の史実に顧みても、一九世紀後半からイギリスおよび世界の穀物価格は低落した。これは或るいみでアメリカの粗放穀作経営による低廉な価格がヨーロッパの集約的穀作経営を征服した結果といってもよいが、そうだからといってこの事實は必ずしも土地法則を実証するわけのものではない。というのはイギリス及びヨーロッパの農業は縮小はされたにしても依然として経営をつづけ、右の低下した価格を以つてしても集約的経営の高い費用を償うことができなからで、その事實はエスレンやラウルのような農経学者のすぐれた統計の実証しているところである。特にイギリスにみられる牧畜的・工芸的農業形態への集約化は低下した価格の中で十分の競争力を再編成した最大の事例としてよい。そのような社会経済的諸條件を抽象して農業における土地生産性の通減を法則化し、経営技術によるその補足を単に一時的な補償と考えることが根本において人間の創意に対する信頼を弱化し、とりわけ現存社会経済体制を变革しようとする意欲をおししずめようとする階級的志向に連なるものであることは拓否しがたい事實であらう。

現存社会の要請する秩序を最も合理的な、自然の秩序として權威づけるところの自然主義的態度は、重農学派や古典学派においてみられるように、近代社会の草創期にあっては新しい合理主義的精神を象徴する一つの思想的衣裳ではあったが、しかし近代社会の階級

的矛盾と対立のあらわになるにつれてそれはまた新しい合理主義的精神をおしつぶし、真摯な人間の願望と努力とに對して自然の非合理性をおし立てるところの守旧反動的な思想の衣裳ともなる。存在の本質を運動と変化の中に、そしてとりわけ社会的存在の本質をその歴史的な進化と発展の中にみようとすると歴史主義的精神が強く時代の精神としてうかびでてくるのも亦そのためで、自然主義と歴史主義との対立は近代精神史的推移を先後表裏する大きな流れであるといえる。近代人口理論の史的推移も亦、このおなじ精神史的基調の交替と葛藤の中にその階級的利害の対立を強く表明しているといつてよいのである。むしろ人口問題こそ自然主義的精神の破産と歴史主義的精神の擡頭を動機づけるのに最も格好の問題であつたといふこともできよう。

五 一九世紀中葉以降、マルサス主義の傳承とその変貌

(一) 時代の概観

歴史的感覚の強化は広く一九世紀の近代精神史を貫く基調としてブルジョアの理論の中にも亦その生長をみせる。一九世紀における伝統的なマルサス主義の主張の中に観取されるさまざまの変容や新しい色あいもこれを実証するもので、それがこの世紀における資本主義の障目的な発展に、したがってまたそれにとりもなう階級分化の新しい推移と表裏符合するものであることはいうまでもない。

物じて社会進化の途上にまぬがれがたい明暗表裏の相はあつたとはいへ、一九世紀の中葉以降、資本主義の国際的規模におけるすさまじい発展は一般生活水準の不断の上昇を可能にした。オッペンハイマーがその反マルサスの人口論作「マルサスの人口法則と最近の経済学者たち」(一九〇一年)の中でミュルハルの統計学辞典を資料

として計算してゐるやうに、一八四〇年から八八年にいたる間、つよく資本主義経済の支配下にあつた歐洲、北米合衆国および諸植民地の農耕地面積は六五%を増加し、その穀物收穫量は僅に一二〇%を増加した。しかしこの間における人口の増加は、人類史上未曾有のものであつたといへ、約七〇%の増加であり、農業人口の増加は五〇%であつた。土地単位当りの收穫量も、人口一人当りの收穫量も、ともに著しく増大したわけになる。オッペンハイマーの考へるやうに、この数字がマルサス人口論と土地收穫遞減法則とを根本的に否定するに足る必要にして十分な論拠となるかどうかは別として、この時代における先進資本主義諸国における一般生活水準上昇の大勢を髣髴するには不足しまい。同じく右オッペンハイマーの引用により例をドイツ一國にとつてみても、一八八〇—八二年から九四—九六年にいたる間に農耕地面積は一二%を増加したが、その總收穫量は小麦に換算して約二一%を増し、一エーカー当り收穫量は三〇%を増している。がこの間の人口増加は、こゝでもまた未曾有のものであつたといへ、なお約一五%に止まるのである。食肉の生産に到つては牛に換算して一八七三—九二年間に僅に五九%の著増であり、人口一人当りの肉量は輸入も加えると約四三%の増加となつた勘定になる。およそそのような生活空間の資本主義的拡大につれて資本主義草創期にみられたような露骨な階級的対照は次第に緩和され、労働者階級の生活水準も漸次に向上の道を歩んだ。とくに人口現象の上からこれを見ると、公衆衛生の近代的普及につれて死亡率は年を追つて着実に低下しはじめた。そして人口は、これらの先進資本主義諸国においては、文字どおりに史上未曾有の増加趨勢を辿つた。一九世紀の始めに九百万にも足らなかつたイギリスの人口は世紀の終りには三千万を遙かに突破しており、しかもこの間北米その他世界の各地に送り出した移民数はスコットランドやアイルランドを含めるとおよそ千五百万前後に達すると概算されている。ま

たこの間、歐洲の人口は世紀はじめの一億九千万弱からその末には四億余となつたと推定されており、主として歐洲移民の収容地であつた北米合衆国ではその始め六百万に遙かに及ばなかつた人口がその末期には八千万を優にこえるに到つたほどの著増ぶりである。しかもこのような史上未曾有の人口増加がこの時代の生産諸力の劃時代的な發展のテンポにはなお及ばなかつたといふこと、いゝかえればそれが一般生活水準の目に見えた上昇の中で賄われていたところに資本主義経済のほん放な發展期を象徴する明るい世相は十分に納得されよう。とはいへ、このような人口増加を生み出した生活空間の近代的解放は近代的階級分化の圧力を最高度に伸張し最大限に滲透させることによつてくりひろげられたものであつたことも忘れてはなるまい。それに一般生活水準の近代的上昇は生活様式の近代化にともなう近代的な生活不安と表裏しており、周期的な景氣の変動はそのような不安を一そう切實深刻なものにする。そして階級分化と景氣變動とは言わば脈動する近代社会の運動中枢として、景氣の上昇の中に階級分化を普遍化し、景氣の交替によつてまたその階級的圧力を一そう強化した。人口があたかも魔法の力によつて呼び出されたかのような増大過程を辿つた理由はそこにあり、この累加する増大人口が近代的な生活不安を根底から一そう不安にするものとなつたことはいふまでもない。かつてマルサスを悩ました「貧民」は産業革命が暴力的にはじき出したところの余剰人口であつたが、いま近代社会の全般的な展開過程の中で生み出されてくる人口は恰も自由意志で生まれてくるかのような自然増加人口であつた。いわゆる「貧民」はたしかに社会の表面から姿を消した。一般生活水準はたしかに不断の上昇過程を辿つてゐる。そうだからこそまた庶民大衆にとっては過剰人口の把握が漸くかれらの味得しかけたばかりの新しい生活を脅かす無氣味な亡霊として立ち現われてきたわけだ。徹底して支配階級の理論として立論されたマルサスの人口論が

一九世紀を通じて大衆的関心の中にその伝承的權威を存続しつづけたゆえんも亦ここにあるといつてよいであろう。と同時に、その階級的基盤の推移にともなう理論の姿貌と發展もまた鋭く追跡されねばなるまい。

(二) ドイツにおけるマルサス主義の 伝承とその發展

このような事情は國際的におくれて資本主義の世界にはいったドイツのような後進國においてとくに切実な様相を呈した。後進國として当然にその生長を一段と加速しながら、立ちおくれた内外の障害からくるさまざまな困難がその國民意識にひきおこす特殊の理論的葛藤がこゝに人口理論の特別な發展を上げさせたことはいうまでもない。イギリスが産業革命期の社会的波瀾を全く完了してから、即ち一九世紀の四〇年前後にドイツは漸く産業革命の洗礼をうける。それだけ歴史のテンポは急速で、そこから生まれる社会的葛藤も亦はげしかった。新しく生まれようとするドイツを代表する最初の經濟学者フリードリヒ・リストがその「國民經濟学体系」(一八四一年)によって經濟の歴史的發展段階による相違をとき、工業立國の將來に明るい希望をよせたとき、そしてまたそのように待望された工業生産力の見地からマルサスの人口論に強い語調で反対したとき、それはドイツ自身の切実な希求を代弁したわけで、その經濟發展段階が歴史的な感覚に新しい理論的視野を開拓したものであることはいうまでもないが、しかしリカアドの經濟学が真正面からとりあげマルサスの人口論もが露骨に表明していた近代社会の階級的矛盾と対立の問題はリストにおいては先進國と後進國との間の國民的葛藤の問題にその重心をおきかえられてしまった。理論的分析の深さにおいてはやはり一步の後退を感じざるをえまい。その後の指導的講壇經濟学者の多くを一樣に平板なマルサス主義の解説者と

して登場させているのも後進國ドイツの國情のしからしむるところといえよう。

しかしドイツの資本主義的發展が國際的水準に追いつき、新生せる統一國家として國際競争場裡に割りこみはじめるとき、すなわち前世紀の七〇年代以降、人口論議はむしろドイツ学界を中心として一段と活潑化した。七〇年代のドイツは普仏戦争後のわずかの繁榮期をのぞいて漫性的な不景氣の支配した時代であるが、國民人口の急テンポな近代的再編成過程の生み出した人口増加がこゝでとりわけ陰鬱な背景となってきたことはいうまでもない。そしてマルサス人口論の權威がこゝに強く伝承されたことも異とするに足りない。爾來ドイツの地にとくに活潑化する人口論議の先驅に立つものはリユーマリンである。特にリユーマリンが七〇年代末に新聞紙上に發表した「過剰人口論」は当時のドイツの陰鬱な世相を前にして之をとくに人口問題の立場から、いゝかえれば過剰人口の結果として反省すべきことを論究したもので、人口問題に対する世論の注意を喚起する上に多大の功績のあつた歴史的意義のふかい文章であつた。その論旨も往時の封建的な諸拘束から解放された近代ドイツ國民、とくに勞働者階級の無思慮で軽率な結婚や出産にこの禍の真因ありとするもので、フランスにみられるような有意的な産兒の制限を真似るだけの近代的教養がない以上は国法を以って經濟的無能力者の結婚を抑制することも亦やむをえずとまでリユーマリンは極論している。すべての社会悪の根源を大衆の無思慮な増殖にありとするそのような態度がマルサスの人口論とその思想的立場をひとしくするものであることはいうまでもなく、リユーマリンがマルサス主義者を以って自任するのも固より故なしとしない。

とはいへこゝにたゞマルサスのドイツ式縮刷版を考証するだけならば人口論史上にも特別に筆をとゞめる必要もないことである。がリユーマリンの祖述したマルサスは同時に新しい時代感覺が攝取

したマルサスであった。マルサス主義のそのような修正と変貌とは
かれがマルサス主義者としての信條を解説した別論「マルサス人口
学説」に詳しい。もっともこゝでもリューメリン自身は自ら正統の
マルサス主義者を以って自任している。即ちいう、マルサスの人口
学説はその統計学のおよび心理学的な立証過程の中に若干の個別的
な欠陥をもってはいるが、全体としては全く覆しがたい極めて自明
な真理であると。しかもこのような信條の吐露をもって書き出され
ているこの論文は、同時にそのような信條の中に生長しつゝあつた
時代感覚の影響を窺取させるに不足しないのである。マルサス人口
論の断言的で、いさゝかの妥協も許さない粗硬な歴史哲学的体裁は
すでに実証的な時代の感覚にふさわしいものではなかつた。そして

リューメリンが人間生来の過大増殖傾向を語るとき、それはマルサ
スの場合のように自然の大法則にまで抽象された自然生物学的な事
実としてではなくて、眼前に実証せられるところの統計学的事実で
あつた。その頃、一八七五—一八八〇年間のドイツ人口の年平均増加率
は一二%に近く、この異帯な年増加率は百年後に一億四千万近くの
人口を生み出すに足るものであつたし、一八七一年以降の九カ年間の
実増加数は約四百万で当時のヴェルテンブルグの総人口の二倍に
達した。しかもこれはこの間千百万に及ぶ死亡と百万前後の海外移
住人口を差し引いた実増加数であつた。専らそのような統計的事実

を素材とし、当時の進歩した統計学的知識をかりてリューメリン
は、マルサス人口論の統計学的欠陥を謙虚な祖述者の態度で指摘す
るのである。例えばマルサスの人口二十五年倍加説は人口統計学的
に欠陥がある。人口二十五年倍加説は人口統計学的に全く支持しが
たい。とはいへ、リューメリンの修正計算によつても、夫婦の出産
児数を四人とするなら人口は百三十六年にして倍加するであろう
し、五児を生むならば死亡率はこれにつれて高まるとしても倍加期
間は七十年となる等々、およそそのような統計学的計算をリューメ

リンは委細をつくして試みている。自然主義的な誇張を捨てた人口
論のそのような統計学的偏向は人口論史上リューメリンの踏襲者と
なつたアドルフ・ワグナーその他の後のマルサス主義者たちにも
同様にうかゞわれるところで、マルサス人口論の理論的迫力をそれ
だけ弱小化したことはうたがいないが、しかしまたわれわれはそこ
に理論的構成員の退歩よりもむしろ時代の歴史的な感覚の強化、実
証主義的精神の昂揚をみおとしてはなるまい。歴史的相対主義に陥
つた実証主義的精神も一九世紀の、とくにドイツを母国として生長
した歴史主義的精神の一つの歴史的形態であつたことはいうまでも
ない。

リューメリンがマルサス人口論における心理学的欠陥として指摘
するところにもやはり時代の精神はつよく代表されている。リュー
メリンはマルサスが人口増殖の心理学的分析に際して単に衝動的、
感性的な本能だけしかとりあげなかつたことを難じ、これに加え
て更に理性的な父母愛の本能の存在をとき、この二つの本能の相互
独立性とその相互補足的な関係の中にこそ種の保存にとって必要な
自然の摂理はあるとしているが、たしかに近代的な産児制限はこの
ような二つの本能の機械的人為的な分離にその自然的基礎をもつて
いるともいってよからう。

産児制限の普及による出生率の近代的低下運動はドイツでもおよ
その頃から始まつたわけであるが、この新しい人口の動きは勿論
まだリューメリンの人口論の史料とはならなかつた。しかし、リュー
メリンは過剰人口の抑制を専ら窮乏と罪悪の中にみようとすするマ
ルサスの理論的構成が人類社会の進歩を不可能にする歴史的背理に
強く注目し、人口増加の妨げが、マルサスのとくような禁慾的な道德
的抑制やさもなければ非道德的な罪悪などの外に、道德的にはむし
る無記であるさまざまの社会的な拘束や制度の世界の中にもあるこ
とを説いている。そしてリューメリンは人類社会の進歩と向上と

が主としてこのような社会制度の力によって成就されてきたものであることを力説している。なぜかといって、果してマルサスのいうように人口増加がたゞ食糧にのみ制約されており、人口増加にたゞさわる本能はたゞこの生存資料の限界をのりこえようとする力と傾向をもってしているとすると、したがってまた一切の妨げはたゞこの力を罪悪と窮乏によってこの限界内に押しとどめるだけの働きしかないものとする、人類社会はその最初の生活段階に立ちどまったまゝその経済生活においても又その徳性においてもはや何らの進歩も不可能であつたことになるからである。

そのようなわけで、マルサス主義者リューメリンはマルサスの基本命題に対して一つの重大な修正と補足の必要を提議する。曰く、凡ての道徳的に陶冶された国民はその収入をその人口数よりも速かに増加させ、人口の増加を経済的手段の増加よりもずっと手前に立ちどまらせる傾向をもってしていると。しかしこのような反対傾向の存在を確認することも、リューメリンにとっては、マルサス人口論を反駁し否定することではなく、それはむしろどこまでもマルサス人口論の理解を洗練し鋭くしただけの修正であり補足であるにすぎないものと考えられている。

マルサスの伝統的權威をよく再確認しながら、その自然主義的偏向を去勢し、時代の歴史的感覚と宥和させようとするこのような態度はその後の指導的なマルサス主義者についてもまた一様にみとめられるところで、例えばアドルフ・ワグナー（「経済学原論」第三版一八九三年）はマルサスが人口増加という経験的な事実を傾向として自然法則化したことを批難しながらも、そして人口扶養力の難易が終局的にこの現実の人口増加を促進もまた抑制もするものであることをときながらも、われわれの家族的情緒や性本能の強さが現今の文明諸民族にあつても特にその大多數を占める下層階級人口において人口扶養力の限界をこえる危険のあることをみとめ、こ

の危険の指摘こそ所謂マルサス人口論の覆しがたく、明白自明で、かつ経験的にも実証されるところの核心的真理だとしている。

そういういみでマルサスは、ワグナーにとっては、あらゆる本質的な点においてなお正當なのである。確かに各時代はそれぞれに固有な人口の動きをみせている。そしてその点をマルサスは十分にとき尽さなかつたし、そういう面については社会主義者のマルサス批判は十分にいみがあるが、しかしそれはワグナーによれば、それぞれの史的生産秩序がそれぞれ独特の人口法則をもってゐるからではなく、たゞ各時代の人口扶養力の相違がいつでも妥当する人口法則に違つた姿を与えてゐるにすぎないことになる。

またワグナーと並んで当時のドイツ経済学界の双壁であつた後期歴史学派の巨匠シュモラー（「国民経済学原論」一九〇〇年）も現在の人口増加傾向をあまりに自然的、絶對的なものとみたマルサスを難じ、過剰人口の社会的ないし技術的な分析によるその補完の必要をといっているが、しかし嘗つて前期歴史学派の先鋒ウイヘルム・ロッシュが「永遠の財産」と讃辞したマルサス人口論の伝統的權威を承認する点においてははかわりない。後にディーツェルが当時のマルサズ論争の掉尾をかざる論策「マルサス学説をめぐる論争」（一九〇五年）の中でマルサスを弁護しながら、人口法則は文明人においては無効にされることのできる自然法則なのだとした態度はこの時代のマルサス主義者のマルサス固執の立場を要約して遺憾ないものといえよう。

（三） マルサス主義の民主々義的修正と

その限界

マルサス人口論の伝統的權威の中で行われたそのような歴史的感度の強化、マルサス主義の内容の部分的、ときには本質的な変貌過程はわれわれが上段に見てきたような一九世紀中葉以降の社会経済

史的状况の變化を想起するとき、その真意を一そうはつきりと納得させよう。階級分化と景気変動を経緯として遅く生長する近代資本主義社会が自ら生み出した未曾有の人口増加は、たしかにマルサス人口論の権威を再認させるに足るものではあったが、この人口圧力は当の大衆自身の日常生活にのしかゝってくる切実な時事問題として被支配階級の大衆的利益に直接する問題となってきた。生産の劃時代的膨脹、一般生活水準の不断の向上も、貨幣経済の逶迤、都市生活の普及など生活様式の近代化過程と相まって、人口圧力を近代市民大衆の一人々々に一段と切実に意識させるに到った。そこにかつてはイギリス支配階級の利害を代弁したマルサス人口論がいまはよりよく生きようとする広汎な近代市民階級の切実な実感を代表する格好なイデオロギーとして継承されるに到った理由があったわけだ、マルサス人口論の歴史哲学的ないし自然主義的な粉飾や誇張の放棄と歴史主義的ないし実証主義的態度の強化も理論のそのような階級の背景の推移に負うものであることはいうまでもない。そういう意味でそれはマルサス人口論の民主主義的な継承ないし修正といつてもよからうとおもう。

と同時に、そのような理論的改良を可能にした階級的基盤、すなわち近代小市民階級がこの時代の民主主義的進化を代表する大きな社会的勢力には相違なかったが、階級的にはかえって雑多で無組織なものであったこともあわせ考慮しておく必要がある。人口問題は一人々々の近代市民たちの利害にふれる問題として取りあげられ、その対策は近代市民各自の個人的教養の向上にまつべきものであることが正しく強調されたが、そのかわり当の人口問題自体は人類社会一般の受けとらねばならぬ自然生物的宿命とされ、してその問題の核心点は社会の外なる自然に投げ出された。人口法則は文明社会の中では無効にされることのできる自然法則だといった上記デイーツェルの要約的表現はそのような事情を考慮するとき一段

と含蓄に富んだ言葉となるであろう。そこに民主主義的に改良修正されたマルサス主義の歴史の意義もあればまたその限界もあり、改良された強みもあれば肝腎の脊骨を抜いてしまった弱みもある。

このような改良と修正はさらに時代の経過につれて反マルサスの主張にまで脱化した。すでにリュエーメンはマルサス説の補完として人口増加を所得の限界以下に停止させようとする反対傾向の存在をといっていたが、ユリウス・ウォルフ（「出産減退、現代における性生活の合理化」一九一二年）になると、このような傾向をマルサス人口論に対立させ、これに代替するところの新しい人口法則として主張するようにさえてくる。文明諸国の人口はその拡大しゆく生活空間を決して充ててしまわず、その余力を個人の生活水準の向上にふりかける。そうでなければ人類社会の進歩は嘗て不可能でもあったろうし、将来もまた不可能事となると。したがって、ウォルフによれば、マイヤーやプリンチングラの如く単にマルサス人口法則を否定し、人口法則の歴史的相対性をとくだけではいけない。マルサスの人口法則にかわる単一な人口法則がなければならぬ。それが右の法則なのだといふのである。このような安易な単純化はこの時代の新しい人口動態がなお爾後にみられるような深刻な人口減少の把握を呼びおこすほどの進行をみせず、もっぱら近代市民の思慮深い自己適應運動、性生活の近代的合理化運動として遲滞なく評価された時代の単純率直な理論的表現にすぎぬ。いゝかえればそういう時代の小市民階級の自己陶酔的な気分の一表現であったにすぎない。小市民階級の立場から民主化され修正されたマルサス主義、いゝかえれば支配階級の立場から固持された脊骨を去勢してしまったマルサス人口論の本質はこのような理論的偏向の中でかえってその本質なき本質を露出していうこともできよう。実際の歴史はそのような理論的安堵をのりこえて容赦なく進行した。